
召喚魔王

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚魔王

【Zマーク】

Z1933

【作者名】

海士龍

【あらすじ】

ある日、突然、悪魔ラウムによつて、魔界に召喚されてしまった。

そして、何らかの理由で死んでしまった魔王の死を隠す為に、魔王の振りをしなければならないことになり……。

いつたい、誰が魔王を殺したのか。
一番疑わしい者は、誰？

他の悪魔達に偽者だとバレずに、生きて、人間界に帰ることができ
るだろうか。

1 紫雲

呼ばれた気がして、窓の外を見やつた。

当然のことだが、そこに入る姿はない。

教室は三階に位置し、視線を下方に移動されば、無人のテニスコートが見えた。

不意に太陽が陰る。

暗くなつた空に目を向けると、分厚い雲が空を覆つてゐる。

紫帶びており、何やら不気味だ。

上空の風は強いのか、ビデオを早送りにしているかのよう、雲が蠢いてゐる。

キラリ。

一瞬、雲の中で何かが輝いたように見えた。
鏡を反射させたかのような光がもう一度。

(なんだろう?)

飛行機だろうかと、目を凝らす。
けれど、光はそれつきりだつた。

肩を叩かれた。

振り向くと、少女が鞄を手に立っていた。

長い黒髪を一つお下げにし、大きな瞳で見つめてくる。

彼女は私に向かつて小首を傾げた。

「帰らないの？」

言われて気付く。

いつの間にか、ホームルームは終わっていて、他のクラスメイトたちの姿は教室から消えていた。

「帰るよ」

「そう」

大きな瞳が伏せられる。

その憂いを帯びた表情に今度は私が首を傾げた。

「どうしたの？」

「好きなの」

「え」

怪訝な表情を浮かべてしまつ。
「何が？」と聞き返すと、彼女は腕をまつすぐに伸ばし、私を指差した。

「好き」

「……」

「すぐ好き。私だけのものにして、誰の手にも触れさせたくないわ」

彼女の瞳を凝視する。

ふざけているのかと思つたが、彼女の瞳は真剣そのものだった。

「あの……」

何か応えなければと、戸惑いながら口を開いた。

けれど、私の言葉を遮るように、彼女が頭を左右に振つた。

「分かっているの。あなたは私だけのものにはなってくれない。私がどんなにあなたを愛していても」

彼女の気持ちにまったく気付いていなかつたわけではなかつた。

出会つたのは高校の入学式後。
そう遠い昔のことではない。

けれど、明るくて甘え上手な彼女に私はすぐに打ち解けて、校内
どこに行くのも常に一緒に行動した。

いろんなことを話したし、いろんなことを2人で試した。

親友だと思つていた。

だから、彼女が時々浮かべる切なげな表情に、気付いていても、
気付いていない振りをした。

親友のままでいたかったから。

と同時に、これ以上、彼女に囚われたくないと思っていた。

私は彼女だけのものにはなれない。

彼女の気持ちのすべてに応えることができないのだ。

「『めん』

謝るしかできない私に、彼女はなんだ笑みを浮かべた。

「ひどい人ね。でも、そこがいいの。悔しくて、憎みたくなるけれ

「ど

「……」

「嫌いよ。あなたが私以外の人を見つめる度に、私はあなたのその瞳をえぐりたくなるの。恨めしいわ。あなたが私以外の人と話をする度に、私はあなたの唇を縫い付けたくなるの。……いつそ、あなたを消してしまいたいわ」

再び、彼女は頭を左右に振った。
己の考えを打ち消すように。

「もう帰るわね。また明日」

彼女は、くるりと背を向け、軽く手を振って教室を出て行った。

その背を、私は何とも言い難い気持ちで見送った。
胸にずしりと重い石を乗せられたようだつた。

(帰^かう)

ひとり取り残された教室を眺めて、机の横に掛けてある学生鞄を手にした。
それから、ふと窓の外に目を向ける。

(夕立でも来るのかな)

やはり外は暗い。
まるで夜だ。

放課後だとは言え、真冬でももう少し明るい。
完全に沈んでいない太陽の光を受けて教室は赤く染まり、東の空
から次第に紺色が迫ってきてようやく夜になるものだ。

まして今の季節は、初夏。
この暗さは普通ではない。

キラリ。

再び何かが輝いた。
分厚い雲に目を凝らしたその時、足下の床が消えた。
物にしがみ付く間も、ただ驚く間もなく、私の体は下へ下へと
落ちていった。

2 木棺

カビ臭い。

耐え難い悪臭に、私は飛び起きた。

ガツン。

額を何かでぶつける。

痛みに顔を歪めながら辺りを窺うと、どうやら堅い板の上に寝かされているようだ。

辺りは闇。

瞼を開いているはずなのに、それを疑いたくなる暗さだ。

右手を上に伸ばせば、伸ばしきれない内に何かに触れた。
板のようだ。

ざらざらとした木皿を感じる。

ずいぶんと低い天井を確認してから、次は左右に両腕を伸ばして
みた。

ほんの僅かに広げただけで壁があつた。

板の上にいるのではなく、狭い空間に閉じ込められている感じ
と分かつた。

私は天井の板に両手を着くと、思いつきりそれを押し上げた。

ガタン、と音が響く。

板は鈍く動き、指三本分くらいの隙間を作った。

光が差し込んでくる。

目を細め、両足も使いながら力の限り押しやつた。
大きな音を響かせてそれは床に沈んだ。

上体を起こし、改めて辺りを見渡した。

(ハハ、 どう?)

古い教会のようだ。

けれど、それにしても十字架が一つも見あたらないし、どこか陰
気だ。

高い天井に描かれた絵はくすんでおり、それを支える柱はひびが
入っている。

窓を飾るステンドグラスは割れしており、ほとんど原型が分からな
い。

広い空間だ。

その中央に大きな黒い箱が置かれていて、私の体はその中にある。

カビの臭いは箱から漂つてきているのだと気付いて、そこから這
い出た。

不吉な予感がした。

つい先程まで閉じ込められていた箱を見下ろし、絶句する。

ひつぎ
棺だ。

この黒光りする大きな箱は間違いなく木棺もつかんだつた。

(なんで私、こんなところに入っていたんだろう？)

訳が分からぬ。

教室にいたはずなのに…。

その教室の床が突然抜け、転落したこと思い出した。では、ここは教室の下？

(んなわけがない！)

すぐに否定する。

学校の真下に、こんな教会みたいな建物があるはずがないのだ。

おそらく、落ちた後、何者かに運ばれたのだ。

(なんのために?)

いや、そもそも、教室の床が抜け落ちるとこいつらが起こり得ることなのだろうか。

とんでもない大惨事だ。
無傷で済むはずがない。

全身を見渡してみた。

痛むところも無ければ、擦り傷ひとつ無かつた。

では、夢だったのだろうか。

そして、今も夢の中をさまよっているのだろうか…。

混乱する頭を整理しようと、額に手を置いた時だった。

「まあー。」

甲高い声が響き、弾かれたように振り返った。

少女だ。

腰まである黒髪を一いつお下げにして、私に向かって満面の笑みを浮かべている。

私は勢いに押されるように後ずさつた。

踵が床を打つ音が、広い空間に反響した。

「素晴らしいですね。まさか成功しちゃいますなんて！ 初めまして。わたくし、ラウムとこうう者です」

少女は、私の両手をぎゅっと握り締めると、けたたましく名乗つた。

そして、次から次へと耳を疑つのような言葉を吐き散らした。

「この度は魔界へようこそお越し下さいました。わたくしもまさか、わたくしじごとき者の召喚術が成功するとは思いも寄らず、あなた様が棺から出てこられ、ドックリ、ドッキリですわ」

更に言ひ募りつとしたラウムを、私は片手で制する。

(ちよつと待て。今、なんて言つた?)

『魔界』と聞こえたようだし、『召喚』とも聞こえたようだ。

その意味を理解しようと努力に努力を重ねながら、私はラウムに聞き返した。

「ルイ、魔界?」

「はい」

「あなたが私をここに連れてきたの?」

「はい、召喚しました」

ラウムは、けろつとした表情で答えた。
まったく悪びれる様子がない。

絶句する。

だが、いつまでも、彼女の笑顔を黙つて眺めているわけにもいかず、私は肺いっぱいに空気を吸い込んだ。

「今すぐ私を元の場所に帰せ！」

「嫌です！」

荒げて言えば、相手も声を荒げてくる。
思わず反撃に私の方が怯んでしまう。

そして、更に追い打ちをかけるよつて、ラウムは潤んだ瞳で見つめてきた。

私は閉口した。

「せつかく術が成功しましたのに……。わたし、召喚術は苦手なんですね」

「いや、そんな苦労、聞いてないから」

泣かれると、弱い。

自分が悪いような気がしてくる。

しかし、ここで負けるわけにはいかない。いきなり魔界に連れてこられたのだ。

よりもよつて魔界！

魔界がいつたいどうこう場所なのか知らないうが、どうせ、もう一度もない場所に決まっている。

(一刻も早く帰らないと…)

ラウムは、泣いてもダメだと悟ったようだ、今度は怒ったように頬を膨らませた。

やや逆ギレ気味だ。

「困るんです！　あなた様にはここにいて頂かないと途轍もなく困るんです！　実は先日、我が国の魔王陛下が隠居を決められまして、その後継をお選びになられました。我が君です！」

熱く語り出された話はどう考えても自分とは関係なさうで、私は、ふーん、と鼻を鳴らした。

そんなことよりも帰してくれ、といつ言葉を喉元で堪えながら話を聞いていると、急にラウムの声が低まつた。

「ところが、我が君が即位され大喜びしていた矢先のこと。我が君が突然お亡くなりになってしまったのです。このことが他の王子たちに知られれば、王位を巡つて我が国は血で血を洗う争いとなってしまいます。そして、それだけならまだしも、他国に隙を付かれ、國を乗つ取られるということにもなりかねません」

「へえ、大変だね。 だけど、それが私とどういう関係があるの？」

痺れを切らせて聞いたのだが、ラウムはあくまでマイペースに話を続けるらしい。

私の疑問には一切触れず、そこで、と言葉を続けた。

「わたくしは内密に陛下の死をお知らせする手紙を先王陛下宛に送りました。その手紙が先王陛下に届き、先王陛下が新たな後継者をお選びになるまで陛下の死を隠すことにしたのです。ですが、わたくしの使い魔が先王陛下の元にたどり着くまで数日の時間を必要とします。その間、陛下の姿がまったく見られないとなれば疑う者も現れましょう」

そこで、とラウムは人差し指を私に向けて言い放った。

「陛下そつくりの者を召喚することにしたのです」

(まか)

嫌な予感は的中するもので、ラウムは元気良べ、はい、と頷いた。

「あなた様こそ陛下のそつべつさんです！」

「冗談じゃない！」

なぜ魔王が、『JJK普通の女子高校生とそつべりな顔をしているんだ？』

あり得ない！

だが、ラウムは更にあり得ない言葉を続けた。

「お願いします。しばらべの間で良いので、陛下の身代わりを努めて下さいませんか？」

「無理」

即答だ。

当たり前だらう。

考える余地もない。

むしろ私は、即答せずに僅かでも考へることのできるの方を尊敬する。

「さつさと、私を人間界に帰せー！」

「……」

強く言い過ぎたのか、ラウムは押し黙つた。
それから、彼女はやや俯き、暗くした表情の奥でキラシと妖しく
瞳を輝かせた。

「今までおっしゃるのなら仕方ありませんわね。わたくしはせつ
かく召喚できたあなた様を人間界に帰すつもりは、これっぽちもござ
ござません。他の悪魔に頼むか、魔界でのたれ死んでください」

「はあ？ 何？ 冗談でしょ？」

あんまりのことになると聞き返せば、ラウムはほこりと笑つた。

「本気です」

その語尾にハートマークでも付いていそうな響きに絶句する。
そして、更にハートを撒き散らしながら彼女は言つた。

「どうなさいますか？ わたくしに従い、陛下の身代わりを務めた

後、無事に人間界に帰るか。それとも、魔界の魔物に食われるか。
この辺りは意地汚い魔物が多いので、頭からバリバリ、骨まで残さ
ず食べられますわよ？」

「卑怯な！」

「悪魔ですか？」

そうか、と妙に納得してしまつ。

ここが魔界なら、この目の前にいる少女が人間のはずがなく、悪
魔であつても何ら不思議ではない。

と言つて、悪魔相手によく今の今まで自分は平然と会話をしてい
たものだと感心する。

とにかく、ここは魔界で、この悪魔の言つとおりに魔王の身代わ
りになるしか五体満足で元の世界に帰る方法はないらしい。
私はため息一つ付いて、ラウムに従う意思を示した。

3 魔王城

何一つイメージに違わずそれは佇んでいて、私はあんぐりと口を開けて、それを見上げた。

薙が這い、苔の覆われた城壁。

錆びた鉄の城門は無駄に大きく、大人の身長の五倍はありそうだ。

紫色の空に赤と青の一いつの月が浮かび、それらを覆い隠すように桃色の雲が長く薄く浮かんでいる。

「……」

「魔王城ですか？」

「やつぱし？」

こんな不気味な城になど入りたくない、と黙々と捏ねても無駄であろうことは、ラウムの表情を見れば分かる。

彼女は私の腕をガツチリ掴んで城門をくぐった。

石畳の上を行くと、アーチ状の門が現れて、その奥まつたところに大きな扉がある。

ラウムが軽く手を触ると、扉は自然に開き、鈍い音を響かせた。

「陸トー。」

まさに扉が開いたとたんだ。

その顔を見せせるより早く声が駆け寄ってきた。

「陸ト、いつたいどうにいらしたのですか？　ずっとお探ししていましたのですよ」

青みかかった黒髪に、瑠璃色の瞳。

すらりと背が高く、床まで届く長いローブを着込んでいる。

「…誰？」

「オセ様ですわ」

「だから、誰よ？」

顔を近付けてラウムに訊けば、彼女の答えはちつとも要領を得ない。

名前を聞きたいのではなく、彼はどのような立場にある人で、自分はどのように彼に接すればいいのか、ということを聞きたいのだ。もう一度、ラウムに問い合わせそうとした時だ。

オセの腕がぬつと伸びてきて、私の肩をがしつと掴んだ。

「執務のお時間です。直ちに執務室にいらしてください」

「へ？」

「さあ、行きますよ

「ちょっと…待つ…」

否と言つ暇もない。

腕を掴む力は強く、抵抗を許さない。

また、私の方も、下手なことを口にして、この優男に人間だとバレてしまつことを恐れ、おとなしく従つしかなかつた。

半ば引きずられながら城の奥へ奥へと移動する。

「この魔王城は、外觀はああだが、内装はそれほどでもない」ということが分かつた。

薄暗く、蜘蛛の巣が張り巡らされていいる様子を覚悟していたが、照明は予想外にも明るい。

巨大なシャンデリアが高い天井から吊り下げられており、掃除の行き届いた廊下は蜘蛛の巣ビビリか鏡のように輝いている。

そして、連れてこられた執務室は、いかにも偉い人が使っていそうな豪華さで、床に敷かれた絨毯の模様の細かさや、革のソファの

艶やかで、黒光りする机の装飾などは、見ているだけでテンションが上がる。

執務机の前に座られると、オセに視線だけで机の上を指し示された。

きれいに重ねられている書類をチラ見して、再びオセを仰ぎ見た。

こつこつと笑顔を送られる。

どうやら、この書類を片付けようと誓つたらしい。

(片付けろって言つたつて…)

もちろん棚や机の引き出しに仕舞えという意味ではない。
魔王として執務をこなせ、といふことなのだね。

(ていうか、魔王って、机に向かつて執務とかするんだ?)

そこらへんは、人間の王様と事情が同じのよつだ。
悪魔の王にも王としての責務があるらしい。

てっきり悪魔は無秩序で、思つがままに遊んで生きていくのかと思つていたから、驚きだ。

(できないとか言つたら、偽者だつてことが一瞬でバレてしまつん

だらうなあ（

執務の邪魔だからと、ラウムはオセによって廊下に締め出された
いる。

助けは期待できない。

（魔王の執務がどんなもんだか知らないけど、やるつときやないー。）

私は投げやりな気分で、書類をパラパラと指先で捲つてみた。

（あれ？）

意外や意外。

行儀良く並んでいる文字は漢字だ。

悪魔と聞けば歐米をイメージするので、てっきりアルファベット
の羅列かと思っていた。

平仮名はないので日本語ではないらしいが、漢字ならば何となく
意味は分かりそうだ。

（『殺人間数於壹年』？）

読めそうな一文に視線を落として、親指の爪を前歯に当てる。

(殺人、間数……。違うな。人間を殺す数、一年に於いて？ つまり『一年において殺す人間の数』って意味かな。おおっ、読めた！)

やつたあ、と机の下で、こいつそり拳を握る。

けれど、なぜ漢字なのだろうか。

特にラウムは日本の高校に通っていても違和感がないように思う。

(日系悪魔とか?)

首を傾げながら私は羽ペンを手にした。

『殺人間数於壹年』の下に数字を書く形式になっている。
おそらくこの書類は、悪魔が一年間でどれくらい人間を殺すのか
を決める書類なのだろう。

ここは人間としてゼロ以外の数字は書きたくないところだ。

「よし、ゼロでー。」

ほとんど丸。

勢いよくゼロと書いてやると、オセは驚いたような表情を浮かべた。

「今年は人間を殺さないんですか？ まつたく？」

「うん。 そう」

「そうですか。 ……それもよろしいかと」

大反対されるだらうと覚悟していたのだが、オセはすんなりと頷いて私を驚かせた。

「いいの？ 本当に？」

「ええ。 実は以前から考えていたのですが、無益に命を奪うのはどうかと…」

悪魔ならば、殺戮してなんぼ、人間を殺したくて仕方がないだろうと思っていたので、オセのその言葉に耳を疑う。

(へえ。 悪魔にも博愛主義者つているんだ?)

意外だけど、悪くはない。

私は涼しげな顔を仰ぎ見た。

彼の仕草は豹のようにしなやかで、体重を感じさせない。

年齢はいくつくらいだろうか。

二十代前半？

落ち着いた雰囲気からして、もう少し大人な気がする。

（いやいや、ちょっと待てよ…）

相手が悪魔であることをうつかり失念してしまった。

悪魔の年齢の数え方は知らないが、おそらく彼が二十数年しか生きていなってことはないとと思う。

一百歳つてことはあり得るかもしれないが。

意味が分かりそうな漢字から読み進めていつて、何枚目かの書類に取りかかるうとしていた時だった。

コンコン、と軽い音が響いた。

「失礼致します」

扉が開き、ラウムがメイドのような格好をして現れた。ティーセットを乗せたワゴンを引いている。

「なんですか？ 陛下は執務中です」

「休憩も必要だと思いまして。それに、ベリス公がお見えなのです」

さつとオセの顔が曇った。

なぜ急に、と独り言のように呟く。

「陛下、わたしが参ります。ですから、陛下は引き続き執務をなさつていください」

オセは慌ただしく執務室を出て行つた。

4 程序

オセの足音が聞こえなくなると、ふふっとラウムが笑みを漏らした。

「行きましたわね」

ワゴンからティーカップを取り出すと、私の皿の前でお茶を入れてくれる。

香りや色を見る限り紅茶らしい。

けれど、私としては、のほほんと紅茶を飲んでいる場合ではない。

「ラウム。ちゃんと説明してよ。 まず、オセって何者?」

「オセ様は陛下の一一番の側近で、陛下の執務のお手伝いをされている方です。また、我が国の軍事を掌握なさいています。怒らせたら面倒なことになりますよ」

軍事権を所持している秘書官と云うことか。

魔王はよほど彼を信頼していたらしい。

と同時に、彼は魔王と近しい関係だと云うことだ。

(よくばれなかつたなあ)

偽者だとバレてもおかしくない状況だったと思つ。彼が本物の魔王の人となりをよく知つてゐるのなら、私のちょっとした仕草にも疑問を持つはずだ。

(オセに接するときは気を付けなこと…)

それじゃあ、と言つて、ラウムに視線を向ける。

「今、来たとかいうベリスって?」

「ベリス公ですわ。我が國の公爵の地位にあります」

「ふうん。公爵…」

どうやら悪魔社会にも身分といつものがあつて、いろいろと複雑そうだ。

私は更に質問を重ねる。

「ラウムはよく、我が国、我が国の魔王陛下とかいう言い方をするけど、他にも魔王がいるの?」

「ええ、それはもう。魔界魔王の地位にある方は九十九名いらっしゃいます」

「そんなに？」

「いえ、ちゃんと数えた者がいないので。『とにかく大勢』という意味で九十九という数字を使っています」

「おーおー……」

なんて適當！

悪魔社会の何かを垣間見た心地になった。

ともあれ、魔王は大勢いるらしく、その魔王の数だけ国があるのだという。

そうだとすると、魔王だの、陛下だの言われていても大したことないのかもしれない。

考えが顔に出たのか、ラウムは大きく首を左右に振った。

「確かに名ばかりの王は大勢いますけど、陛下のお父上であらせられる先王陛下は王の中の王、大王と呼ばれる方でした。なので、その王子である陛下も一目を置かれた存在だったのです。皆がその誕生を祝い、皆がその美しさに賞賛の言葉を口にしました」

「へえ

いまいち凄さは伝わらなかつたが、とりあえず感心してみる。

すると、ラウムは満足したらしく、二二二二笑みを浮かべながら

先程の話題に戻つた。

「魔界にも秩序というものがありまして、多くの王たちを束ねる皇帝陛下がいらっしゃいます。その下に皇帝直属の閣僚たちと將軍たち。そして、皇帝陛下がご自身と同等に扱われる方、すなわち、大公殿下がいらっしゃいまして、大公殿下が束ねる貴族の方々がいらっしゃいます。王の下にも、その王が支配する国の貴族がいまして、順に、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵です」

ちなみに、トラウムは続けて、自分は伯爵の地位を貰つていると
言つて話を締めた。

そんなことよりも、トラウムの顔が真剣なものに変わったのはそ
の直後だ。

思わず私も姿勢を正した。

「なぜ急にベリス公がいらっしゃったか……ですわ。陛下の身に起
きたことを」「存じなかもしません」

「どうござりと?」

ベリスとやらが魔王が死んだことを知っていたからと言つて何が
問題なのだろうか。

首を傾げてから思い当たる。

魔王が死んだことはトラウムと彼女の使い魔しか知らないはずなの

だ。

それをもしふリスが知つてゐるとしたら

。

「あんたの魔王は突然死んだとか言つたよね？ 死因は？」

「それがよく分からぬのです」

「殺された、つてことは？」

ラウムも視野に入れていたことだつたらしく、彼女の瞳がキラッ
と妖しく輝いた。

「外傷はございませんでした。おそらく毒か呪い。何者かに殺され
たのでなければ、ああも急にお亡くなりになるはずがないません
！ ベリス公の突然の訪問。もしや…」

「ベリスつていう奴を疑つてるの？」

「めつたにいらつしゃらない方なのです。それがこの突然過ぎる登
城……。怪しいですわ」

「確かに」

ラウムの言葉に深々と頷くと、彼女は私の両手をがつしりと握つ
た。

「くれぐれもベリス公やオセ様に偽者だとバレませんように。敵はどこに潜んでいるのか分かりません。それに向こうは陛下を殺したと思っています。ところが、目の前にご無事な陛下の姿がある。必ず焦り、行動に出るはずです」

ラウムの必死さは、握られた手の痛みから伝わってくる。
だけど、私にとって、魔王が誰に殺されたかは、結構どうでもいい。

とにかく、五体満足で人間界に帰ることができたら、それでいいのだから。

「まあ。犯人捜しは、あんたに任せると。私はバレないよ」と気を付ける

「協力して下さらないのですか？」

「十分協力してるでしょ？」

「ですが…」

ラウムは頬に片手を置いて、考え込む仕草をする。
そして、瞳をキラリと輝かせ、にこやかに言い放つた。

「敵をハッキリさせれば、あなた様の安全性は増しますわ」

「は？」

「先程わたくしは『必ず焦り、行動に出るはず』と申し上げました。つまり、犯人は再び陛下を殺そうとする旨を申したのです。陛下の身代わりであるあなた様は命を狙われます。あなた様は我が身が可愛くはないのですか？」

「何が言いたいの？」

「攻撃は最大の防御ですわ」

一ツコロヒ、語尾にハートマークを付けて、ラウムは可憐らしく言った。

「要するに、自分の身を守りたければ、犯人探しに協力しろと言いたいわけね」

笑顔で齧していく。

さすが悪魔だ。

私は肩を落としてため息を着いた。

仕方がない。

ここは魔界で、周りは悪魔だらけ。自分の命が掛かっているのだ。

とにかく今は目の前の悪魔に従うしかない。

了解、と短く答えて私は片手を上げた。

5 紋章

ほのかに甘い。

紅茶特有の渋みはなく、まるやかな味のみが舌に残った。

のほほんと、紅茶を飲んでいる場合ではないと思いつつも、オセが戻つて来るのを待つてゐるうちに飲み干してしまった。

結局、オセは執務室に戻つてこなかった。

すると、ラウムは満面の笑みで手を打ち鳴らした。
執務は終了と言つのだ。

ラウムに促されて執務室から廊下に出る。

長い廊下をしばらく行くと、金色に大きく紋章が描かれた扉の前にたどり着いた。

聞けば、悪魔には個々に所有する紋章があつて、この紋章はこの部屋の主の紋章だと言つ。
つまり、魔王の紋章だ。

「リリが陛下のお部屋です。御自由にお使い下さいって結構ですわ

部屋の中に入ると、ラウムはそう言つたが、人様の部屋だ。
しかも、魔王。

使いづらっこ」と、口の上ない。

私は部屋の中を点検するよつと歩き回つた。

床に敷かれた敷物はたぶん動物の革だ。

なんの動物かっていうのはちょっと判断付かない。

高い天井には当然のようにシャンデリアが下がつていて、ただ広い空間を皓々と照らしている。

どうやら奥にももう一部屋あるらしい。

そちらは寝室となつており、中央に天蓋付きのベッドが置かれている。

いくつか並んだタンスの一つを何気なく開いてみると、ずりりと並んだ服を確認しながら、やつぱりと思つて至つた。

「私、思いつ切り制服姿なんだけど……？」

学校から召喚されたのだ。

当然そのまんまの格好でここにいる。

「あんたたち悪魔は、この格好を見て何の疑問も湧かないわけ？」

オセは自分の主が女子高生の格好をしていても平然としていた。ラウムも着替えると言わない。

私はタンスから一着取り出すと、自分の体に当ててみた。

「これ、男物だよね？ 魔王って男？」

「ええ、まあ、そのようなものですけど？」

いまいちハツキリしない返事だが、今までの会話の中、ラウムは魔王に対して『王子』という単語を使っていた。
おそらく魔王は男なのだな。

すると、つまり、私そつくりの男がいるというわけで、しかもその男はスカートを穿いていても疑問を持たれない人物なのだ。

「きつとオセ様は、いつものコスプレだと思われたのですわ

「コスプレー？ コスプレって……。あんたたちの魔王っていったい…」

悪魔もコスプレをするものなのか、という疑問よりも、さっぱり魔王像がイメージできなくてガックリ肩を落とす。

廊下の方で軽い音が響いた。

ラウムが扉を開くと、オセが渋い顔で廊下に立っていた。

「失礼致します。ベリス公が陛下と晚餐を一緒にしたいとの仰せで

す。すぐに食堂の方へこらして下れ。」

「食堂に？ ベリスと一緒に食事をするの？」

「はい、そのようだ」

答えたあと、オセは顔を囁かる。

「なにか不都合でも？ ベリス公にお断わりいたしましたよ？」

「うん、そういうわけじゃ……」

(ヤバイ。怪しまれた?)

そりと、オセの顔を盗み見ると、彼は部屋にやつて来た時同様、
渋い表情をしている。

(あれ?)

もしかして、と思つ。

オセは、魔王がベリスと食事するのを良く思つていのかも。

私の視線に気付き、オセは柔らかく表情を弛ませた。

「何か？」

「ううん、何でもない。食堂に行けばいいんだよね？ 分かった。
すぐ行くよ」

「……承知致しました」

不自然な間をつくつてから、オセは頭を下げた。
魔王としての対応を誤ったのではないかと不安になる。

ちらりと、ラウムに視線を向ける。
すると、彼女は己の手元を見つめて、表情を硬くしていた。
やはり、何か間違えたのだろうか。

だが、オセが部屋を出ていくと、ラウムは私の視線に気が付き、
ふわりと笑みを浮かべた。

「さつそくベリス公に探りを入れるチャンスが訪れましたね。しかし、陛下とベリス公は幼なじみ。ここ数百年は距離を置かれていたようですが、陛下をよく知る方です。くれぐれも気をつけて下さい」

「もし偽物だつてバレちゃつたら？」

「殺されます！」

スパツと、まるでナイフで切り裂くように言い切ったラウム。

私は、ひいー、と口を横に引いて声なき悲鳴を上げた。
やはりベリスとの食事は断つた方が良かつただどうか……。

6・晚餐

ラウムに案内されて食堂に向かつ。

だが、魔王とベリスの晚餐に彼女は同席できないようで、食堂の入り口でラウムと別れ、私は薄暗い部屋の中へ、一人で足を踏み入れた。

食堂の中央に食卓。

それは無駄に長い机で、真っ白なテーブルクロスが敷かれており、金色の燭台が五つ、一定の間隔をあけて置かれている。

橙色の蠟燭の明かり。

電気の明かりに比べて、雰囲気はあるが、どうも暗い。

そのため、私は、食堂で魔王を待ちわびていた人物にすぐに気付くことができなかつた。

「陛下、お久し振りでございます」

明るい声音が響く。

驚き、視線を向けると、赤毛の少年が私の足下に膝を置いていた。

同じ年くらいに見えるが、この少年も悪魔なのだ、きっと見かけ通りの年齢ではないのだろう。

先程、ラウムは『ここ数百年』と言っていた。

さつ氣なさ過ぎて聞き流してしまったが、悪魔たちにとって数百年は『ここ』で言い表せる時間の内らしい。

つかり年齢を聞いてしまったら、数百歳単位で答えられそうだ。

私は、跪くベリスをまじまじと見つめた。

背丈はオセほど高くはないが、けして低くはなく、腰に下げている大剣がよく似合っている。

真紅の瞳は大きく、ビックアドケナサがあつた。

人好きのする顔だ。

馴染みやすい雰囲気がある。

というよりも、私はなぜか、彼に懐かしさを覚えた。

「しばらく足が遠のいていたこと、お許し下さい」

一通りの挨拶が済むと、ベリスは顔を上げた。

優雅な動作で立ち上がり、私のために椅子を引いてくれる。

高い背もたれの付いた木造の椅子。

見た目の硬さに反して、座つてみると、ふわりと包まれるようこそり心地が良かつた。

私がしつかりと腰を落ち着かせたのを確認してから、ベリスは食卓を周り、向かいの席に腰掛けた。

カラカラ、と食堂の奥の闇から音が響いてきた。

やがて、蠅燭の揺らめく灯りに照らされて、ワゴンを押して近付いて来る少女の姿が、闇の中から浮かび上がってきた。

少女は、私とベリスのグラスに真っ赤な飲み物を注いだ。

(まさかとは思つけれど、血……じゃないよ……ね?)

普通に考えたら、ワイン。
意表をついて、トマトジュース。
アセロラドリンクだったり、喜んで飲めるのだが、ここはあまり期待しない方が良い気がする。

「お待たせいたしました」

少女の声に視線を食卓に向けると、最初の料理が用意されていた。
私がグラスの中の液体を凝視している間に、並べてくれたのだろう。
その手際の良さに感心する。

私は料理に視線を落とした。

悪魔の食事なのだ。

どんなゲテモノ料理が出てくるだらうかと覚悟していたが、用意された前菜を見てホッと息を付く。

何かは知らないけれど、とりあえず見た感じ食べられそうな野菜のソテーだ。

カラカラと、再びワゴンを押して、給仕の少女は奥に下がつていく。

私はベリスと二人きりになつた。

(ビーベリス)

ラウムには、ベリスに探りを入れてことと言われているが、いつたいどうやって探ればいいのだろうか。

田の前の悪魔に対し、どんな言葉を掛ければいいのか、せつぱり分からぬ。

(「ひつ。沈黙が怖い」)

何か話さなきやと、口を開くが、やはり何も思い付かなくて、口いっぱいに料理を詰め込んだ。

(お？)

まろやかな酸味が口の中にふわりと広がった。
それから塩氣と、少しだけ辛味を。

口に含んだ料理は予想外に美味しかった。

パクパクと食べて、あつとこつ間に一皿食べ尽くしてしまつ。

すると、その頃合いを見計らつていたかのように、カラカラと音
が響いてきた。

闇から、ワゴンを引いた少女が現れ、次の料理を並べて再び闇へ
と消えた。

(ヤバイ。このままだと、食べて終わつてしまつー。)

皿の前の皿には、なんの肉だか分からぬが、よだれの出そうな
くらいに臭い焦げ皿のついた肉。

香りと、皿に滴る肉汁が更に食欲をそそる。

しかし、ダメだ！
このまま食べてばかりいては！
何か話さないと！

肉にナイフを通しながら、私はベリスに視線を向けた。

言葉が決まらないまま口を開く。

「あの……」

「突然来て、悪かつたな」

「えつ」

声が重なった。

瞳を大きくした私にベリスは柔らかく微笑んだ。

「急に会いたくなつたんだ」

「うわー、と思わず仰け反る。

悪魔とは思えない微笑みの穏やかさに、ついつい見惚れてしまつた。

そして、今の一言で、ぐっとベリスとの距離が縮まつたよつて思う。

先程とは口調が変わっているのだ。

まるで敬語を忘れてしまったかのよつたな碎けた口ぶり。

(そつか、幼なじみだつけ)

一人だけの時は親しい態度を取る許しを得ていいのかもしれない。

部屋が薄暗くて助かった。

ベリスは私の驚きには気付かず、ナイフで小心翼しく切った野菜をフォークで口元に運んだ。

その綺麗な仕草はいかにも育ちの良さそうな坊ちゃんといつ感じだ。

「昨日、この城の辺りで星が落ちるのを見た」

「星が落ちた？ 流れ星ってこと？」

「そうだとしたら、なんてロマンチックな話だううと、悪魔を目の前にして拍子抜けした気分になつたが、どうやら流れ星は悪魔について楽しいものではないようだ。

ベリスは視線を皿に落として言葉を続ける。

「不吉な感じがする。何か変わったことは起きなかつたか？」

「変わつたこと？」

がりつと、ナイフが皿の上で声を放つ。
冷や汗が流れた。

流れ星で、こんなにも背筋が冷たくなる日が来るとは、思ひもよ
らなかつた。

(変わつたこと…)

ないことはないが、ここは『ない』と答えておくしかない。

まさか、魔王が死んじゃつて、人間を身代わりにしています、な
んて言えるわけがない。

「ええつと。心配して来てくれたの？ わざわざ？ 流れ星を見た
くらいで？」

「ああ」

「ありがとう」

自然に出た感謝の言葉だつた。

人間の友人だつて、不安を感じて駆け付けてくれる人なんて多く
はない。

悪魔のくせにずいぶん情に厚いみたいだ。

いやいや、そつ容易く信じてはいけない。
流れ星っていうのは言い訳で、本当はラウムの推理通り魔王の死
を確かめに来たのかもしねりない。

もしもつなら、ベリスは相当の悪人かもしれない。
情の厚い振りして、ものすゞく酷いことを企んでいるとか。

(いや、でも。悪人といつか、悪魔なんだけど…)

私はベリスの顔を盗み見た。

彼は相変わらず俯いたままだが、臣として当然だ、と言つて
心から嬉しそうに笑みを浮かべた。

ドキリとする。

やましいことがある者の笑い方ではない。

無邪氣で、可愛い。

見惚れていると、不意に赤い瞳と目が合つた。

「本当に、何もないんだな？」

「うん」

「なら、いい」

カチャリ、とベリスの皿の上で音が響いた。
空になつた皿にナイフとフォークを置くと、彼はナップキンで口を

拭つた。

「お疲れさまでした」

魔王の宝座に座ると、その扉の前でラウムが私を待っていた。

「どうでしたか?」

部屋に入った私を追い掛けながらラウムが訊いてきた。

私は人差し指を口元に押し当てる、そうだな、と口を開いた。

「思うに、ベリスは白だよ。あの顔は悪いことのできなそつな顔だよ」

素直そうで、いかにもまっすぐ育つたといつ感じの少年だった。

そう言つて、ラウムはあからさまに表情を歪めた。
今にも舌打ちをしそうな顔だ。

「騙されています! あなた様はベリス公をご存知ないのです。あの方は嘘得意とします。聞かされた言葉を鵜呑みにしてはなりません!」

きつへ肩を掴まれて、私は顔を顰める。

「でも、嘘をついてるよ！」

見えなかつたと言おうとしたのだが、肩の痛みに断念させられた。

(痛い！痛いって！…ぜったい爪が食い込んでる…)

「ベリス公は何かと陛下に馴々しく振る舞い、無礼を働いているのです。陛下を侮っている証拠です！反逆心を抱いているに違いありません！」

「分かった。分かったから！離して。痛い！」

ハツとしたような顔になる。

ラウムは申し訳なさそうに眉を下げる。

「お疲れになられましたでしきつ？ 今日おやすみなさいませ」

確かに疲れていた。

突然いろんなことがあり過ぎたせいで。

休みたい。

ベッドで『ローロ』したい。

私は頷いて、ラウムの案内で寝室に移動した。

部屋の中央に天蓋付きのベッド。

当然のことながら、魔王が使っていたものだ。

「私、ここに寝るの？」

「はい」

(ちゅう...)

そもそも当然だとこういふように。

いや、むしろ、『何をこまから聞いてこるんだ、すつとソレハ いー』といった感じの返事だ。

(けどやー、いくり死んじゃつてゐからつて、魔王の物を使つなん
て、怖いんですけどっ！？)

頭を左右に何度も振つて拒絕してみたが、ラウムは満面の笑みを浮かべて華麗にスルー。

「それでは、おやすみなさいませ」

静かに扉を開め、部屋から出て行った。

体を揺すられて重い瞼を開いた。
田の前に見知らぬ少女の顔。

いや、ラウムだ。

悪魔の顔面ビアッフに驚いて飛び起きた。

「おはようございます。お田喰めはいかがですか？」

「良くはない」

当然だ。

田覚めた場所は魔界で、魔王の城の魔王の寝室なのだから。

（つてこうか、もう朝？ わりと眠つたばかりだつた気がするんだけど）

つまり、私はまったく寝た心地のしないまま起これてしまつたのだ。

しかし、ラウムは、田覚めが悪いと言つて、私の前で衣装を広げてくれたつもりはないらしく、涼しげな顔をして私の前に衣装を広げた。

「はい、今日はこれを着てくださいね。サイズはちょっと大きいかもしれませんけど、きっと、たぶん、大丈夫です」

『きっと』と『たぶん』を同時に使うのはどうかと思ひ。

それでもって、おそらく全然大丈夫じゃない。

広げられた物を見下ろしてから、私は衣装タンスの前に移動した。着られそうな服を適当に選んで身に着ける。

「なぜそれなんですかーっ！」

「そんな着ぐるみ着られるかーっ！」

今ここのいやがわがあったら、絶対ひっくり返してこむ。

ラウムが着ると書いて広げた物は得体の知れない生き物の着ぐるみだった。

頭のてっぺんに付けられたピンク色のリボンがどんなに可愛さを主張していても、テロリと伸びた長い舌や九つもある目玉は気持ち悪さを叫んでいる。

あり得ない。

私が着替えを済ませてしまつとラウムは諦めたようで、ファッショングセンスをチェックするように、私の周りをぐるっと一周した。

「この服を着るのでしたら、この黒いマントもちゃんと羽織つてください。でないと、マヌケですわ」

「やうこつもんなの？」

マヌケとは思わないが、アドバイス通りに大きな肩パットの付い

たマントを羽織った。

(うわお。いかにも魔王っぽい!…)

満足を顔満面に浮かべて、ラウムは何度も頷いた。

「お似合いですわ。さあ、オセ様がお待ちなので執務室に参りましょう」

「は？ 執務室？ まさか今日も執務をやれと？」

「はい」

「無理ー。」

短く抱呑してやると、ラウムは皿を線のように細めて笑みを浮かべた。

「大丈夫ですよ。昨日も何とかなりましたでしょ?」

「昨日は昨日。今日は今日ー。」

それに昨日だって十分に危なかつたのだ。

オセは魔王にかなり近い人物で、魔王の性格や癖を知り尽くしている様子だった。

ちょっとでも変な言動をしたら、偽物だとバレてしまいそうで、怖い。

絶対に無理だから、と言つ私にラウムは大きく頭を左右に振った。そして、カツと瞳を見開いた。

「やつて頂きます！」

有無を言わさない気迫があつた。

(「う、怖っ！？」)

オセにバレるとか、そんなことの前に、ラウムに喰われる！
そんな心地になつた。

逆らつても無駄だと知り、私はラウムに手を引かれながら執務室に向かつた。

8・友情

執務室の前まで来ると、ラウムは重々しくため息を着いた。

今にも額を扉にぶち当てそつた勢いで俯いている。ぼそりと零す。

「せつかぐ、オセ様をドッキリビッククリセモツヒ、先程の着ぐるみを用意しましたの」「…」

「はいはー。邪魔だからそいじこで。おはよー、オセ」

ラウムの体を押し退けて扉を開くと、穏やかな顔が振り返った。

「おはよー、わこます、陛下」

その爽やか過ぎる笑顔に、思わず私が硬直した。

(うへん)

確かに、この穏やかな悪魔を『目が点』な状態にさせたいといつラウムの気持ちは分かる。

実に悪魔らしくない爽やか悪魔だ。

だが、しかし。

オセを驚かせるためだけに、あの着ぐるみは着られない。
そこまでは頑張れない気がする。

「今日はどんなことをするの?」

「今日はですね…」

ラウムを執務室から追い出すと、オセは何枚かの書類を机に並べた。

「次に行われるサバトについてです。出席予定の悪魔のリストをご確認下さい。」

長く細い綺麗な指で示された

書類に視線を落とす。

サバトっていうのが、なんだかよく知らないが、オセの言つとり、十数名の悪魔の名前が書いてあった。

「出席を許可できない者の名前があつましたら、おっしゃって下さい」

(…と申されましても)

私は眉を顰めた。

(まずサバトって、何？　そして、名前を見ても誰が誰だか分から
ないんですけど？)

誰が誰だか分からぬ状態で不許可にしたら、後々、面倒なこと
になりそうで、私は書類に大きく丸を書いてオセに返した。

「皆、許可するとこいつ」とよひしこのでしょうが？

「うん。だいたいそんな感じで」

我ながら適当過ぎるー。

さすがに不審がられただろうか、とオセを見やるが、オセは特に
気にしている様子はない。

次はこいつです、なんてことを言つて、新たな書類を差し出して
来た。

そんな感じに執務を始めて一時間ほど経つて、私の顔に疲れが見
え始めた時、その頃合いを見計らつていたとしか思えないタイミン
グで、扉が叩かれる音が聞こえた。

「失礼いたします」

ラウムだ。

昨日同様メイド姿でワゴンを引いてくる。

どうやら彼女の中では『執務室にお茶を出す時はメイド姿で』と
いう決まりがあるらしい。

差し出されて思わず呑んでしまった紅茶を見下ろして、私は顔を
躊躇めた。

(辛い?)

もしかすると、紅茶だと思っていたこれは紅茶ではないのかもし
れない。

カップを受け皿に戻すと、ラウムが、そうですわ、と手を打ち鳴
らした。

「カイム様がお見えになられました

「カイム殿が?」

驚きの声はオセの口から。

なぜそれを先に言わないのかと、ラウムを睨む。

「陛下、わたしが出迎えに参ります」

「うん、頼んだ」

私の答えを聞いたか否かで、慌ただしくオセは執務室を出て行った。

その足音が聞こえなくなつてからラウムに振り返る。

「誰が来たつて？」

「カイム様ですわ。統領^{とうりょう}の地位にある方です」

「統領つて、何？」

「總統^{とうじゆう}と同じく国家元首の地位を表す名称です。けれど、我が国においては魔王陛下こそが国家元首ですので、總統ではなく統領と名乗り、また、陛下から委任された領地を治めています」

「統領と總統の違いつて、王がいるか、いないか？ 魔王のいない国つて、あるわけ？」

「統領は王の庇護の下にあるのですが、總統は統領よりも権限が多く独裁が強いので、もはや『王』と名乗らないだけの事実上の王

です。そのため總統の治める領地は『國』と称されます。ちなみに、悪魔たちの多くでは『總統』といつ呼び方よりも『大統領』の方が好まれて使われています

「大統領？ ああ、それなら分かる気がする」

ポン、と手のひらを打つと、ラウムは肩の力を抜いて表情を和らげた。

だが、すぐにカイムのことを思い出して、重々しく言葉を吐く。

「『』のような時期に『』いらっしゃる方では『』ませんの『』

怪しいですわ、とラウムは拳を口元に押し当てる。

眉を寄せ、考え込む仕草をしている彼女に、執務机に頬杖を着きながら尋ねた。

「疑つてゐるの？」

「はい。 だって、おかしいですわ。いつもなら登城される数日前に手紙を送られる方なんです。今回に限つてそのような手紙はなく、普段なら『』しゃるはずのない時期に『』いつも急に」

それに、とラウムは私の顔にまつすぐ瞳をぶつけてくる。

「カイム様とオセ様は『親友なのです。もしや一人はグルかもしれません』

「一人がかりで魔王を呪い殺したとか？」

「ええ、そうですよ。そうに違いありません。きっとあなた様を見て、事の失敗を悟ったオセ様がカイム様を呼び寄せたのです。間接的に呪いで殺せないのなら、直接手を下そうと思つてゐるに違いないのです！」

息巻きながらラウムの自分の推理を披露していると、足音が戻ってきた。

ノックの後、丁寧に扉が開き、オセが顔を覗かせた。

「カイム殿が陛下との謁見を望んでいます。急ぎとのことです」

「急ぎ？ うん、分かった。すぐ行く」

「では、そのようにカイム殿にお伝えして参ります」

再びオセが退出してしまって、ラウムが痛いほど強く私の腕を掴んできた。

「どうぞ気を付けて下さい。カイム様は極度の人間嫌い。偽物で、しかも人間だとバレてしまつたら、確実に命はございません！」

「そんなにヤバイ奴なの？」

ラウムは頷く代わりに、不安一杯の瞳をぶつけてきた。どうやら本当にヤバいらしい。

9・綱渡り

甲冑姿の青年が、銀色に輝く兜を取ると床に置き、私の足下に跪いた。

兜の下はプラチナブロンド。

サラサラと、髪が流れたその奥で輝いたものは、碧い瞳。

ようやく日本人離れした顔の悪魔と出会ったと思った私だが、これは……と、目の前の人物をマジマジと見つめた。

(なんと言つか……。悪魔というよりも天使だ!…)

白く透き通る肌。

伏せられた顔はギリシア彫刻みたいで、息をしていることが奇跡みたいに綺麗だ。

「陛下、『機嫌いかがですか?』

発せられた声も鳥が囀るようすで……。

私は己の頬をバチンと打ち鳴らした。

(しつかりしろー私ー!! 人間だとバレたら殺されるぞー!…)

そうだ。 そうなのだ。

自分は今、綱渡りをしている状況だったのだ。

目の前にいる悪魔は、もしかしたら魔王を殺したかもしれない悪魔で、私は今、魔王の振りをしているわけで、殺し損ねたと思われ、命を狙われてもおかしくない立場にあるのだ。

ただでさえ、人間だとバレたら終わりだといつうのに、完璧に魔王を演じきっても危険だつていう……。

何、この状況！？

思わず、『ぐく』と咽を鳴らした。

なんだかんだラウムに言こぐるめられているような気がしてならない。

そして、気付けば、危険がいっぱいな状況だ。

(うー。 無事に生きて人間界に帰れるんだろうか)

ずびおーんと氣分が重くなつた。

しかし、私の取り柄は、最強のポジティブシンキングだつうこと

と。

重い気分は長くは続かない。

それにしても、と改めて目の前の悪魔を眺めた。

急ぎだと叫つか廊下を駆けてきたのに、カイムの動作は優雅で、とても急用だとは思えない。

(いつたい、何をしに来たんだろう。)

首を傾げると、彼はニヤリと笑みを浮かべ、私の手を取った。

「何をしに来たかですか？ そんなの決まっていますよ。暇つぶしに遊びに参りました次第です」

「は？ 暇つぶし？」

「はい。あなたは最高の暇つぶしです」

いけしゃあしゃあと言って、私の手の甲に脣を押し当てた。

「…ひー？」

声はなんとか堪えた。
けれど、心の中では大きく叫ぶ。

(ぎやあ！ 何すんのこいつ……)

これがこの悪魔の普段通りの挨拶だとしたら驚くのも不自然だと
思い、顔では必死に平静をつくつた。

けれど、冷や汗はダラダラだ。

カイムは私の手を離し、スッと立ち上がった。

「どうですか。これから人間狩りに出掛けませんか？」

「出掛けません！」

反射的に答えてしまい、しまったと思う。

今度は堪えきれなかつた。キスは堪えられたのに…

だけど、仕方がない。

一度飛び出してしまつた言葉は一度と口には仕舞えない。

誤魔化すように顔を横に逸らすと、カイムは、なぜか追求せずに、

ところへ、と話題を変えた。

「昨日オセから聞いたのですが、今年度の殺す人間の数を決められたそうで」

チラリと彼の顔を横田で見やると、彼は不自然な笑みを称えていた。

「元は横に引かれ、一見すると微笑んでいるようなのだが、眼が明らかに笑っていない。」

「今年はゼロだとか。人間を殺さないとは、いつたいどうこう」とですか？」

(もしかして怒ってる?)

その聲音から何となく相手の感情を読み取つて、私は大きく見開いた瞳で彼を見つめた。

暇つぶしというのは嘘で、人間狩りのお誘いも冗談で、本当は私が勝手に決定してしまった『今年一年は人間を一人も殺さない』ということに不満を抱いて魔王城まで乗り込んできたのかもしねえ。

そうだとすると、カイムは私が本物の魔王だと信じていることになる。

私が決めたことを魔王の決定だと思い、本気で怒っているのだから。

それは同時に、本物の魔王の身に何があつたのかを知らないといつになると、

死んだはずの魔王が生きていることに不審を抱いている様子もない。

(カイムも白だ)

直感的にそう思った。

ぶつちやけ、綺麗すぎる外見に騙されているような氣も、自分ながらに、無くもない。

それに、ラウムの言ひ方によると、カイムとオセは本当に仲が良いらしい。

昨日決めてオセに伝えたことを、今日既にカイムが知っている。それって、ものすごく早すぎないだろうか。

オセはカイムに対して、そういう口が軽いことだと思つ。

それって、政治的に問題あるんじゃないの？

悪魔の政治事情なんて知ったこっちゃないが、オセとカイムの繫

がりに、私は何となく不安を抱いた。

カイムとの謁見を終え、私は謁見の間から廊下に出た。

ここまで案内してくれたオセの姿はない。
ラウムもいないので、一人歩く。

(どこに行こうかなあ)

魔王の自室か、執務室しか知らない。
せつかく一人になれたのだ。

『探検魔王城!』というのも良いかもしない。
ちょっとびり勇者になつた気分で、薄暗い廊下を進んだ。

石畳の廊下に、ブーツの踵の音が怖いほど響く。

その音に気付いた悪魔が私の方に視線を向け、深々と頭を下げた。

片手には長く鋭い槍。

暗闇に田を懲らせば、頭の左右にヤギのよつた角が生えている。

廊下に配置された悪魔はこの悪魔一人ではなく、同様に槍を手にした悪魔が等間隔に配置されている。

それは大抵、部屋の扉の前で、この魔王城はとにかく部屋数が多いことが分かつた。

(下手に動いたら迷子になるかも)

迷子なら良いが、更に下手したら遭難しそうだ。

探検なんて無謀なことほやめて、自室に戻った方が良さそうである。

そう思い、自室へと踵を返した時、柱の後ろに人影を見つけ、私は身構えた。

「そこ」に誰かいる?」

「俺だ」

さつと姿を見せたのはベリスだった。

燃えるような赤毛の少年、ベリス。

魔王の幼馴染みの悪魔だ。

彼は大股で近付いてくると、親しみを含んだ笑顔を浮かべた。

「会いたかった

「ええっと…」

ちょっとびりドキマキする。

そんな直球で言われても、言われ慣れていらないもん、どう反応

して良いのか分からぬ。

故に、私の返事は少しづつきらめくなってしまった。

「何か用？」

「用はないんだけど、会える時に会っておかないと。次にいつ会えるか分からぬから」

私の態度が素っ気なさ過ぎたのか、そう言つと、ベリスは俯いてしまつた。

しかし、私はそんなベリスを見やり、首を傾げる。

「ちょくちょく会いに来ればいいの？」

そんないたいのなら、会いに来ればいいのだ。

幼なじみなのだから、と続けて言つて、私は淡く笑みを浮かべる。

ベリスと話していると、ベリスの魔王に対する信頼といつか好意が伝わってきて、くすぐったいような心地になる。

私自身が慕われているような気持ちになつて、昔、こんな犬を飼つてみたいたと思っていたなあと、ほんわかする。

私は軽く爪先で立ち上がると、ベリスの頭を柔らかく叩いた。

「城に来られない事情でもあるの？」

頭を撫でたのが悪かつたのか、質問が悪かつたのか、ベリスは弾かれたように顔を上げ、私の手を払った。

グッと眼に力を込めて、苦々しく口を開く。

「気に食わない奴がお前の側にベッタリしているから……」

「気に食わない奴？」

私は振り払われた手とベリスの赤く燃える瞳を見比べた。

(オセのことかな?)

魔王の側にいると言えば、側近のオセだ。

執務の時間はもちろんのこと、なんだかんだ言つて、べったりと付き添つてくる。

ところが、オセのことかと尋ねると、ベリスは分かり易いほどハツキリと顔を顰めた。

「それ、本気で言つているのか？ オセがお前にベッタリしているのは幼い頃からだ。先王陛下がお前に付けた遊び相手、兼、教育係

だからな。そのオセを、俺が今更気に食わないなんて言つわけないだろ」「そつか…」

そうだったのかと、私は納得しつつ、表面上はへラへラと笑いながら誤魔化した。

(オセじゃない? … とするヒ、誰?)

ラウムの顔も浮かんだが、カイムの顔も浮かぶ。
手の甲に受けた感触を思い出しながら私は口を開いた。

「じゃあ、カイムでしょ? ベッタリと言つたが、あの人、私の手にキスするから」

「キス?」

ガツン、と鈍い音が響いた。

見やると、ベリスの拳の下でヒビの走っている壁が映った。

(ひいーつ)

俯いた顔。

オーラのように放たれている怒氣。

ベリスの拳が退くと、綺麗なほど見事に拳の形に凹んだ壁が見えて、その怒氣の強さを私に伝えてきた。

「今、なんて言った？」

「言つてない。うん、何にも…」

「あいつ、キスなんてするのかよ！」

「手に、だよ。手…」

キスはキスでも、殴られたかは、この際、とっても重要なことのように思えた。

ベリスの顔面に左手を突き出すと、彼はその手を取つて舌打ちをした。

「前から気に食わないと思つていたんだ！ シトリにやたら色使
うし、元天使のくせにシトリが男でも構わないとか言つしー。」

（シトリって、誰？）

いや、それよりもカイムが元天使だと聞いて納得する。だから、あの姿なのだ。

まるで天使みたいだと思つたら、本当に元は天使だつたらしい。

(どうして、今は悪魔なんだろう?)

天使から悪魔になつたという例は、聖書などを読むとよく出でくる。

そもそも、悪魔の中の悪魔であるルシファーも元々は天使だ。

それにしても、と私はベリスを、慎重に数歩の距離を取りながら眺めた。

一見、育ちの良さそつに見える彼も怒ると見境が無くなるらしい。

あちらこちらの壁に拳を打ち付け、カイムへの暴言を吐き散らしている。

大した二面性の持ち主だ。

ラウムの言うとおり、ベリスも要注意人物かも知れない。犬つころのような笑顔に騙されてはならない。

もしかしたら、魔王への好意も嘘かもしれない。嘘を付くのを得意としている悪魔らしいし…。

と、その時。

「シトリ、危ない！」

不意に腕を引かれ、私は体のバランスを崩した。ドン、とベリスの胸にぶつかり、その後、先程まで立っていた場所に天井が崩れ落ちるのを目撃した。

ズドーン、と壮絶な音を立ててタイルやら煉瓦やらが落ちてきた。砂埃が舞い、視界が曇った。

ベリスの腕の中でジッと身を潜めていると、やがて辺りに元の静けさが帰ってきた。

「『めん、俺のせいだ』

頭上で謝罪が聞こえた。

なるほど、ベリスがところ構わず壁を殴り付けてくれたおかげで天井にまでヒビが入り、ついには落ちてきたりしい。

幸い、上の階の床までは落ちていない。

「どうすんの、これ？」

「『めん』

「…でも、怪我なかつたし」

すっかりし�ょげてしまつたベリスに私は苦笑して、その背に腕を回して軽く叩いてやる。

まるで子どもをあやすみたいに。

(なんだか、やつぱり憎めない)

犬みたいだ、と再び思つ。

一瞬、二面性がどうの疑つたけれど、やはりベリスはそんなに器用なヤツじやないような気がしてきた。

「あれ？」

突然上がつた声に私はビクッと体を震わせた。

疑問符は頭上からで、ベリスは私の両肩に手を置くと、体を引き離した。

ジックと見つめられる。

「シトリつて、柔らかい体をしているんだな。　いや、ギュッとするとい、気持ちいい」

そんなことを口にしてベリスは私を抱き締める。
そして再び、あれ？と首を傾げると、私の体の上に大きな手を這わせる。

ムニコ。

(何！？)

条件反射というヤツだ。

気が付くと、私は悪魔を殴り飛ばしていた。

見事に吹っ飛び、床に沈んだベリスを、私は己の胸を左手で隠しながら見下ろした。

ベリスは、自分が殴られたという状況が掴めないらしく、啞然と私を見上げている。

かつと私の顔に朱が走った。

(なんて奴！私の胸、揉みやがった！)

もう一回ぐらぐら殴つてやるうかと思つた時、ベリスのまぬけ顔が動いた。

口を大きく開いて、言つたのだ。

「女？」

「…っ！」

「小さい頃は、確かに男だったよな？一緒に水遊びして裸見てるし。なんで女になっているんだ？」

かくん、と勢い良く首を傾ける。だいぶ混乱している様子だ。

(うわっ。ヤバイ！)

なんとか、油断した！

今は良い感じに勘違이してくれているが、『男ではない』から『魔王ではない』に結びついてしまつたら大変だ。

偽物だつてバレてしまう！

焦った私はどう誤魔化せば良いのか分からず、とりあえず、ちがーうっ、と叫んで再度ベリスを殴り飛ばし、踵を返した。

11 夜這い

自室に戻ると、昨日同様、その扉の前にラウムが待っていた。彼女は全力疾走で戻ってきた私に、あらあら、と言つて口の頬に手を当てた。

「どうされたんですか？」

「どうって…」

肩で息をしながら、ビームからどう説明したものかと頭をフル回転させる。

だけど、結局、何も浮かばなくて、先程疑問に感じたことを口にしてみた。

「シリリって、誰？」

「え？」

ラウムはきょとんとする。

それほど思いがけない質問をしてしまつただろうか。

私はただ先程ベリスが口にした名前を尋ねただけなのが…。

それからすぐラウムはハツとした様子を見せ、まるでそんな動搖など無かつたかのようにハツキリと答えた。

「それせ陛下の御名ですか」

「魔王の名前?..」

「わたくしは、お教へあるのを忘れていましたー。」

(はあ~?)

「だつて、わたくし、陛下のことは『陛下』もしくは『我が姫』と
しか呼んでいませんもの。うつかり陛下にも御名があることを忘れ
てこました」

(なんだ、それ!...)

私はガックリと肩を落とした。

なぜ忘れるのかが理解できない。

いいんや、百歩譲つたれられるとしても、名前があるひと全体
を忘れるつて、どうなの?

基本的には前つて、誰にでもあるもんなんぢゃないの?

名前がなきや呼べないし...

それとも、なにか？

悪魔には名前がない悪魔がいるとか？

いや、でも、今、話しているのは魔王の名前についてだし。

さすがに名前のない魔王はいないだろ？。

とりあえず私はラウムに向かって、信じられない、と肩を竦める
と、就寝の支度に取りかかったのだ。

さて、その夜のことだ。

私は気配で目覚めた。
パチリと瞼を開くと、驚きに見開かれた瞳と目が合つ。
思わず叫んだ。

「ぎゃああーっ」

「うわあーっ」

つらられたのか、それとも本気で叫んだのか、相手も口を大きく開
き、すぐに私と己の口を手で覆つた。

「うぐう」

辺りは暗闇である。

何者かが体に跨り、上から私を見下ろしている。

私は口を塞がれたまま、いつたい自分の身に何が起こっているのか把握しようと視線を巡らせた。

次第に眼が闇に慣れ、その人物が赤毛の持ち主だと分かった。

(ベリス?)

私に騒ぐ様子がないと知り、彼は手を離した。

「何するのー」

「だつて……」

やはりベリスだ。

呆れたような、怒りで力を使い果たしたような、脱力感に見舞わ
れた。

近すぎるベリスの顔面に頭突きをかまし、自分の体の上からどか
した。

「いてっ

「あんた、いろんなところを何やってるのー。」

「何って、昼間のことでもつ一度確かめよいつて思つて」

「昼間のこと?..」

性別のことだ。

本物の魔王は男だが、偽物の私は女。

ベリスは私を本物だと思つていてるから、昼間、私の胸を触つてビックリしたのだ。

私はため息を漏らした。

そして、ふと口の胸元を見やる。

何やらスースーすると想つていたら、夜着の前が全開で、胸が露わになつていてる。

「何これ!..」

「だから、確かめよいつて思つて…」

「おまえかーつ..」

ガツン。

拳骨でベリスの頭を殴り付ける。

この暗闇で胸が見えたとは思えないが、おそらく直に触れたに違いない。

(なんて奴!)

「シリ、やつぱつ胸が膨らんでる。」

「違う! これは筋肉だ!」

女としてそれはどうよ~と思つが、これは命がけで全否定しておきたい。

だつて、命が掛かっている!

私は絶対に生きて人間界に戻るのだから、こんなとこりで、こんな風に、胸があるとないとかが原因で偽物だとバレて死にたくはない!

しかも、こんな微々たる胸で!

(どうせ私は一見すると無口よつに見えるカッパですよつ!)

もう…女よりも命だと思つた。

心で泣きながら、胸を筋肉だと言い張る。

「ほり、筋肉ムチムチになると、胸が膨らむじやん？ それだよ、それ！」

「筋肉？ けど、柔らかかったぞ？」

（わーっ。やつぱり触つてる…。）

この口悪魔、と罵りたい気持ちを抑えて、私は夜着の前を開ざした。

「誰がなんて言おつと、これは筋肉だ！ つべこべ言つな… とつと出て行けッ…」

枕を顔面めがけて投げつけた。

ぼすっと良い音がなると、たつぶりと綿の入った枕は痛くないだろつに、まるでそれがお約束であるかのように、ベリスは痛いと声を上げた。

「おかしいなあ、絶対に…」

「まだ言つか！」

「分かつたよ。もう言わない」

「よしー、出て行けー！」

びしつ、と扉の方に指差してやれば、渋々といった様子で、ベリスは寝室を出て行った。

暗闇に一人になると、どつと疲れてしまい、ふかふかベッドに背中から倒れ込んだ。

(この部屋、鍵掛かってないわけ……?)

魔王の部屋なのに、なんでこんなにも不用心なのだろうか。

扉に鍵が掛かっていないことに、夜中、眠っている時に誰でも出入りできてしまうことだ。

(寝込み襲われたら、殺されちゃうかもね……)

そして、ベリス。

彼は魔王の部屋に無断で出入りすることに躊躇が無かった。

幼馴染みだから、といつも許容範囲は軽く超えている。

(やつぱつ、ベリスが怪しい…のかな…?)

怪しいと思いつい始めたら、さうに疑わしくなる。

そもそも、本当に、胸の有無を確かめるだけにせつて来たのだろうか。

胸元を開いていたではなく、首元を広げて、頭を切り落としやすくなっていたのでは…？

だつて！

本当に、本当に、ただ胸を確かめに来ただけだったら、ものすごく変態悪魔だ。

そんな変態…、あり得るのだろうか。

朝。

あんなことがあった翌日なので、当然のことながら、田覚めは悪い。

おはよ〜ハジマス、と明るく挨拶してきたラウムに、今日は無理、と答えた。

ラウムが心配そうに顔を覗き込んできた。

「どうかなさったのですか？」

「どうして……」

夜中、田覚めたらベリスに胸を触られていたのだ。

そう答えようとして思に止まる。

ベリスはカイムから手の甲にキスされたことを告げただけで激怒した。

悪魔にとつて何が逆鱗か予測が付かない。

私は思い悩んだ末、当たり障りのない質問をすることにした。

「魔王って、ベリスと仲良かつたの？」

「まあまあですわね」

「オセとほ~」

「まあまあですわ」

「カイムとは?」

「まあまあです……」

答える気があるんだろうつか、と私が若干あきれ顔になつた時、ラウムの表情が歪んだ。

苦しそうに眉を寄せ、私の両腕をきつく握る。

「なぜですか?」

「え。何が?」

「なぜ、他の者の名前ばかりを口にされるのですか? 今、あなた様と共にいるのはわたくしなのに!」

ぐつと囁きを鳴らし、ラウムは俯いた。

その肩が小刻みに震えている。

逆鱗に触れないようひと質問を選んだのだが、選び違えたりしき。
だけど、いつたい何が彼女の気に障つたのだろうか。
怒らせるとやうなことを言つた覚えがないのに。

困惑する私に、ラウムは目を伏したまま声を荒げた。

「わたくしにビービーとおつしゃるのですか？ その瞳をえぐれば
良いのですか？ 囁を切り裂けば良いのですか？ 他の何者よりも
わたくしの方が陛下を愛していますのに！」

「ラウム？」

まさに手が付けられない状態。

名前を呼ぶ」としかできなくて、私が名前を呼ぶと、ラウムはハ
ッと顔を上げた。

目が合つ。

なんて表情をしているのだらう。

悲しそうで、悔しそうで……。

だが、それは一瞬。

すぐにラウムは、ふわりと微笑んだ。

「わたくし、何か言いましたでしょうか？」

「は？」

「お茶をお入れしますね」

言つて、ラウムは私に背を向け、ティーポットに手を伸ばした。カップに紅茶を注ぐ。

振り返り、それを差し出した時の彼女はすでにいつも通りのラウムで、先程のあれは何だったのだろうかと首を傾げざるを得ない。

(何事? !)

さつぱり訳が分からぬ私を他所に、ラウムは爽やか笑顔で言った。

「今日の執務はお休みです。なんでもオセ様に用ができたとか

「へえ、ないんだ」

カップを受け取りながら、それは良かつたと答える。

確かにそれはホツとするような話だ。

魔王の執務は人間には些か決めかねる。

魔界事情にも詳しくないことだし、自分の決定に不安が残るのだ。

（執務がないのは嬉しいことなんだけど…。それにしても辛いんだよね、この紅茶）

下品承知で、私は一度口に入れた液体をだあーっとカップの中に戻す。

入れてくれたラウムには悪い気がしたので、ラウムに見られないように気付けながら…。

そして、顔を顰めながら、カップを机のできる限り遠くの方に置いた。

「オセの用事って、何？」

「詳しいことは聞かされていません。何やらアヤシイですね」

例の如く怪しんでラウムは、といひで、と続けた。

「午後になりますと、シャックス侯がお見えになられるそ�です」

「誰？」

「ベリス公同様、陛下の幼なじみで、侯爵位にあらわれる方です」

「へえ」

「どうぞお気を付け下さい。シャックス侯は他人の心に敏感です。特に人間の心は手に取るように知ることができますわ」

「心を読まれてしまつて」と？

それはマズイ。

偽物だと一発でバレてしまつではないか。

「眞のまゝに心を閉ざす。それができなければ、何も考えないことがあります」

「難しいなあ」

「では、午前中はその練習をしましょ。心を無にするのです」

どこの格闘漫画の修行シーンみたいなセリフだ。
けれど、何も考えないっていうのは漫画のまゝに容易なことではなくて、私はすぐに両手を挙げた。

「無理」

「困りましたね。それでは、なるべくシャックス侯には近付かないでくださいね」

「うん。 そうするよ」

それにしても、次から次にと悪魔がやつて来る。

魔王城なのだから当然なのかも知れないけれど、その度に疑わなければならぬ人物が増えていく。

「ねえ。魔王を殺した動機って何だと思う？」

「この人を見てはアヤシイ、あの人を見てはアヤシイ、と言ついたらキリがない。」

それよりも動機を考え、その動機を抱きそうな人物を上げていった方が早いのではないだろうか。

そう言つと、ラウムは手を打ち鳴らした。

「まあ、さすが陛下のそつくりさんですわ。陛下同様、賢くていらっしゃるー。」

喜んで良いものか、微妙な讃め言葉だが素直に受け取つて私は人

差し指を立てた。

「じゃあ、さつそくだけど、なんで魔王シトリは殺されたと思つ?」

「ズバリ継承争いですわ」

ラウムの瞳がキラリと輝く。

「先王陛下には王子が、陛下を含めて三人いらっしゃいます。しかし、お一人に先王陛下との血の繋がりはなく、なので、世継ぎは当然、我が君。けれど、お一人は納得して下さらなかつたのです」

「ん? ちょっと待つて。血の繋がらない親子って?」

「親子の契約を交わされた父と息子です」

「つまり、養子つてこと? それなら確かに、先王の実子であるシリが王位継ぐのが妥当だよね」

「はい。しかし、お一人の方が、お年が上。年長である」とを理由に継承権を主張されているのです」

「それじゃあ、その一人にはシリを殺す動機があるつてわけだ」

「ええ。そして、わたくしが思ひますに、お一人のどちらかが関わっているに違いありませんわ。けれど、お一人が自ら手を下したとは考えられません。黒幕はそうであるにしろ、狡猾な方々です

から、我が君の身近な者を口の側に引き込み、指示したに違いないのです」

「だから、ラウムはシテロの回つてたる悪魔ばかりを疑っていたのか」

ヒカルド、と私はラウムに向を直つた。

はい、と答えてラウムは水差しを持つてくると、水を注いだグラスを私に手渡した。

水は凍り付く直前のように冷たく、少し辛い。

舌の先がピリピリする。

「その一人の王子たちの名前は？」

「ストラス様とヴァサゴ様です」

「そのビラジカが黒幕だって分かっているのなら、そこつらを調べれば？」

「そんな命知らずないとできません。」

毒やめてラウムが言つには、王子の立場にある者を不用意に疑い、もしもそれが過ちであつたら命を奪われても文句は言えないのだとそうだ。

今更だが、ラウムが誰彼構わず疑いの眼を向けている必死さが分かつた気がする。

疑つて疑つて疑い尽くすしか犯人を突き止める術がなかつたのだ。

午後になり、噂の悪魔 シャックスが魔王城にやつて來た。

彼の特技は盗みで、人の心の内にある言葉まで盗むのだという。

一瞬にして偽物だとバレる可能性が大きい。

なるべく近付きたくない相手だが、登城の挨拶だけは受けなくてはならないらしい。

仕方なく、私は謁見の間に向かつた。

ラウムの案内で謁見の間に行くと、その廊下にラウムを残して、私一人で入室する。

赤い絨毯が敷き詰められた大部屋に入室すると、その悪魔は頭を垂れて跪いた。

ジャラジャラと金属音が響いて、私はシャックスの姿をまじまじと見回した。

悪魔らしくない格好だ。

とは言え、『らしくない』と言い切れるほど悪魔を見知っているわけではないが。

レザージャケットに、レザーパンツ。

ヒールの高いブーツを履いて、腰には鎖が巻き付けられている。

先程のジャラジャラ「は」の鎮だ。

（なんか、見るからに怪しいんだけど…）

ラウムの口癖が移ったわけではないが、怪しこと思われるを得ない。

魔王の玉座に腰を降ろしてから、私が許可を出すと、シャックヌスはゆっくりと顔を上げた。

灰色の髪の影から現れた橙色の瞳。

（うわっ。田つき懸つー。）

心中で声を上げてから、しまったと思い見やると、シャックヌスは物言いたげに私を見上げていた。

おやぢへ今の思ひは読まれてしまつたに違いない。

何とか誤魔化そつと、よく来たね、と言つて、へラへラ笑つてみた。

しーん。

シャックスはクスリとも笑わないし、恐ろしいほど無口だ。

(もう部屋に戻つてもいいかなあ。場が持たないし)

ピクリとシャックスの細眉が動いた。

「 戻られれば良い 」

「 え? 」

「 我は構わない 」

(読まれた!)

私は口元を引きつらせた。

ジロリと、シャックスを睨む。

ところが、仮にも、魔王に睨まれているといひのに、シャックスは怯んだ様子がない。

魔王とこの悪魔は、幼馴染みだと聞いたが、これも幼馴染みならではなのだろうか。

魔王をまったく恐れていない。

もつとも、この魔城にやつて来る悪魔たちは、誰一人として魔王を畏れてはいないが。

(魔王シリの権威つていつたい…つー)

一応、言つておくが、衛兵たちや侍女たちはちゃんと魔王に対し敬つた態度を示してくれている。

態度がでかいのは、ベリスやカイムだ。
そして、オセは魔王に対する容赦がない。

しかし、オセの場合は、教育係なのだから仕方がないのかも知れないけれど。

ところで、と、赤い絨毯に膝を着いているシャックスを眺めながら思った。

(何しに来たんだろう?)

「星が落ちた故…」

「はあ?」

「不吉だと思い、参上した」

ああ、と手を打つ。

またまた考えを読まれたのだ。

「い、また勝手に読みやがって、と思ったが、すぐに諦め氣分になつて、そのまま彼との会話を続けた。

「ベリスも言つてた。星が落ちたつて」

「実際に落ちた故」

愛想の欠片もなく、シャツクスの言葉は簡潔で素つ氣ない。

（ベリスは流れ星を見て、即、駆け付けて来てくれたんだよねえ。
それに比べてこいつてば、ベリスより一回も遅いし）

ピクリとシャツクスの目元が引きつった。

悪い目つきが更に悪くなる。

「私はベリス公のように直情型ではない。調べるべき」と調べてから来た

「調べるべき」とへ

「星が落ちる原因は一つある。一つは偉大なる存在が死した時。もう一つは何者かが強大な魔力を使用した時。私はそのどちらである

かを調べてからここに来た

「……そ、それで？」

サツと冷たいものが背筋を駆け抜け抜けていった。

橙色の瞳はどこまでも見通しているようで、逃げ出したくなる。

シャツクスはしばらく瞼を開ぎし考え込むような仕草をしてから、カツと目を見開いた。

「あの星の落ち方は、何者かが強大な魔力を使用した時の落ち方だ！」

何者か。

おそらくそれはラウムで、彼女が私を魔界に召喚した時に星は落ちたのだ。

だけど、私はここで肩透かしを食らつた気分になる。

てつまつもう一方の原因を口にされたと思っていたからだ。

(あれ？ もしかして偉大な存在じゃないとか？)

シリオは魔王に成り立てで、まだ偉大ではないといふことなのだろうか。

だから、死んでも星は落ちなかつた？

（とにかく、シトリが死んだことがバレたわけじゃないから、良かつた…）

「何？」

「うわ！」

慌てて私は己の口を両手で塞ぐ。
だけど、本当に塞ぎたのは口ではなく心だ。

「今、なんと？」

「何にも言つてませんー！」

「陛下が亡くなつたと聞こへたが……」

「亡くなつてしませんー！」

「私、陛下ー私ーーー

…と、自分を指差して、口をパクパクさせる。

しかし、シャックスは瞳を細め、すくと立ち上がり、一步、
また一步とゆっくりと歩み寄ってきた。

その目は据わっていて、かなり怖い。

「いつたいどうこうことだ？　目の前にいる陛下は陛下ではないのか？」

ガシツと両肩を掴まれて顔を近付けられる。
橙色に自分の顔が映つて、私は息を詰めた。

（もう無理！　考えを読まれちゃう相手にどう誤魔化せつて言つんだ！）

こんなヤツに合わせたラウムを恨みたくなった。

どう足搔いたって、バレないわけがないし、どうしてもバレてはならないのならば、ラウムは私に彼を合わせるべきじゃない！

（あーーーっ。無理！…）

私はシャックスの手を振り払い、彼の胸をドンッと押すと、二人の間に距離を作った。

「そうだよ！　私は偽物なんだ！　ちなみに人間だ！　どうだ驚いたかーー！」

荒げるようだに大声を出して言えば、シャックスは眉を上げ、目を大きくした。

しばらく固まり、押し黙つた末で、ポツリと零した。

「……驚いた」

「……」

何だろ？、この悪魔。
まったく掴めない。

しかも、バレたからといって、すぐに飛び掛かってくる様子はないようだ。

ホッと力が抜けて、ガックリと肩を落とした。

「しかし、何故、人間が魔界に？」

もつともな疑問に私は腰に両手を添える。

「ラウムに召喚されたんだ。なんでも魔王シリオが死んだとかで」

「何？」

シャックスの表情が険しくなる。

とは言え、微妙な変化なので定かではない。
私は構わず言葉を続けた。

「ラウムは、シリの死が他の王子たちに知られると争いになるから、それを隠そうとして、シリそつくりな私を召喚したみたい」

「…確かに、あなたは我が魔王陛下そつくりだ」

「らしいね」

オセやカイムは疑いもしないし、ベリスは私の胸を触つて逆に魔王女性化説を押し立てちゃうくらいだ。

私の顔は、そつくりシリに似ているに違いない。

だけど…。

「もう限界なんだよね。魔王の振りをし続けているのも

さうにかしてくれないだらうか、と言つて、シャックスは瞼を閉ざした。

「確かに、本当に我が魔王が亡くなつたとしたら、その死を隠すのは最善の手。しかし、の方は真実亡くなられたのだろうか？」

「え？ どういって？」

「あなたは陛下の『骸を見られたのか？ 確かに死んでいると

そういうえば、と思ひて頭を巡らせてから、私は首を左右振つた。

「うん、見てない」

自分が把握している現状はすべてラウムから聞かされた情報に限られている。

彼女が、魔王は死んだのだ、と言つので私はそれを信じたのだ。

「これは何か裏がありそうだ」

どうやらシャックスはラウムに疑いを持つたらしい。
私に鋭い瞳をぶつけてきた。

「協力して下さい。眞実を明らかにするために

「協力？」

「このままラウム伯の言ひ通りに振る舞い続けてください。私はその間にラウム伯の真意を測る。」

「ええつー?」

なんだらう、この展開！

そう驚いた時には既にガツチリと腕を掴まれ、体勢的にも心理的にも逃れようがない。

断つたら殺す、といつもうな田舎で睨まれて、私は渋々頷いた。

14 奇病？

シャックスとの謁見を終え、夕食も終えたあと、自室でのんびり過ごしていると、不意に扉をノックされた。

オセカラウムだらうつと思い、軽く返事をすると、扉は遠慮がちにゆっくりと開いた。

「シトロ？」

驚いて振り返ると、ベリスがそこに立っていた。

「な、何？」

「顔が見たくなつて……」

「……」

微妙な沈黙が降りてくる。

魔王とベリスの距離関係が分からぬ今、ここで下手なことを言つたらバレそうで怖い。

だけど、ベリスと一入りで沈黙はもつと怖い。

ベリスは予想外な言動をするくせに、何気に鋭いから困るのだ。

私は会話を探そぐと視線を漂わせた。

「なあ

先に口を開いたのはベリスの方だった。

ベリスよりもさきに話題を見つけられなかつたことに、私はなんだか負けたような気分になる。

(「どうか、こいつ、いったい何を話す気だ!」)

なんとなくだが、先に口を開いた方が会話の主導権を握れるような気がする。

ということは、この場の主導権はベリスに握られてしまつたことになる。

私はドキドキしながらベリスの次の言葉を待つた。

「お前さあ、奇病にかかっているんだろ?」

「はあ~?」

案の定、ベリスの言動は突拍子もなく、意味不明だ。

目が点になる。

何を言われたのか本気で分からなくて、力一杯に聞き返した。

(奇病つて、何!? つか、誰が???)

私が怪訝な顔をすれば、ベリスは焦ったように頭の後ろを搔いた。

「昔、シャックスから聞いたことがあるんだ。男が女になっていく病氣があるつて」

(へえ。魔界にはそんな病氣があるのか…)

つて!

感心している場合じやない。

ガシツと腕を掴まれて私は冷や汗を流した。

ベリスの手は骨張つていて、固い。
大きな手で、まるで小枝を掴むように拘束されながら、私は言葉を失っていた。

「調べさせてくれ

「…な、何を?」

「下の方がどうなつているのか」

「はあ?」

「だつて、お前が心配なんだよ。あんなに胸が膨らんでいて、下も無くなつていたら……。うわあーっ!」

突然絶叫するベリス。

いつたい何を想像したんだろう。

いや、違うな。

いつたい何を妄想したんだろう!つ!

ムカついたので、とりあえず殴つてみた。

「いひつ。ひでえよ、シリ。俺は真剣!」

「随まで言わんでいい。真剣に妄想したんでしょ!」

「心配したんだ!」

「やひ。それはどうもありがとひ。でも、いろいろかり!」

素つ氣なく言つてやつて、そっぽを向いた。

(いつたいなんなんだ、この悪魔はっ！－！－！)

その時、憤慨していた私の視線が、ふと陰った。

目線を上に移動させると、ベリスの脣が間近に迫っていた。

「ちよつとーーー！」

「お前が女になったのなら、俺だつてお前が好きだ。この想い、他の誰にも負けない！」

「なんだ、それーーー！」

いつたいこれはどういう展開なんだろう。

てっきり魔王とベリスの間には男同士の友情が築かれているのかと思つていた。

それなのに、いきなり押し倒されてるしー。

片腕は封じられているので、もう片方で、ぐいぐい迫つてくる顔を防いだ。

だけど、ベリスの力は信じられないほど強い。
何と言つか、さすが悪魔だ。

なんて、誓めていた場合じゃないんだけど。

「男でも女でも構わないなんて言つカイムのやうのことは、正直、気持ち悪いと思っている。だけど、ここ数十年、俺は考えていたんだ」

人様の体の上で、切なげに眉を寄せ語り始めたベリス。
なんの話だ、いつたい！

「俺の方が昔からシトリの傍にいて、シトリのことを想つて来たのに…。他のヤツにシトリがとられるんじやないかって、俺、気が気がじゃなくて…。だから、大丈夫か大丈夫じゃないかって考えたんだ」

さも重大な発表をするかのように、ベリスは間を溜めて、真剣な顔で宣つた。

「俺、シトリ相手なら大丈夫な気がしてきていたんだ」

「何が！？」

ベリスさん、ベリスさん。

私はまったく大丈夫な気がしてこないんですけどっ！

はやく離れて欲しいとの切なる願いは、ベリスに少しも届くことなく、彼はさらに続けた。

「俺、シトリが男でもいいやつて思つてきたんだけど、でも、シリが女なら、ぜんぜん問題ないじゃん？」

「何が……！」

「シトリ、愛してる。俺を受け入れてくれ！」

「嫌だあーっ……！」

（無理！　もう絶対無理！）

「これ以上魔王シトリのふりなんて続けられない。

「これ以上、続けていたら、命の危機より先に貞操の危機だ。

シャックスにバレてしまつたこともあって、もう一人、ベリスク
らいに知られてもいいや、とこう気分になつてきた。

近付いてきた顔を拳で思いつきり殴り、怯んだベリスを力一杯に
睨み付けた。

「これでもか、といづくらうに拒絶の意を込めれば、さすがにベリ
スは気が付いたらしく、私の体の上から退いた。

「なんでだよっ！」

「だつて、私、シリージャないし！」

「は？」

「別人です！」

すぐには信じられないらしく、ぱちくりとベリスは瞬いた。

「なに言つているんだよ。別人だなんて」

「別人です！」

「こんなにシトリにそっくりなヤツがいるわけがない」

「それでも別人です！ ちなみに人間です」

「人間？ 人間がなんでここに？」

良い質問だ。

私もそれを聞きたい。

やや逆ギレ気味に、私はベリスに答えた。

「ラウムに召喚されたの！ この通り、顔が魔王に似ているからー！」

「あの女！」

ガツンッ、と突然ベリスは拳を壁に叩き付けた。
どうやら信じてくれたらしい。

話が分かる悪魔で良かった。

いや、話が分かるつていうか、頭の構造が単純な悪魔なのかもしれないが。

「シリソツくりな人間を魔界に召喚するなんて、何か企んでやがるな。前々から何かやらかしそうで、気に食わなかつたんだ！」

吐き捨てられたベリスの言葉に私は、あれ、と思つ。

(気に食わなかつた?)

「もしかして、ベリスが気に食わなかつた相手つてラウムだったの?
? ラウムが魔王の側にベツタリしているから城に来たくなかった
の?」

「くん、とベリスは頭を縦に動かした。

素直だ。

「素直な態度に出られると、先程、襲われそうになつてしまつ。
ともすつかり忘れそくなつてしまつ。

(犬っぽい…)

ついつい許したくなってしまつから、不思議だ。

それで、ビベリスは眉を顰めた。

「…シトリは？ 本物のシトリはビijoにいるんだ？」

「魔王は死んだって、ラウムが言つていた」

「馬鹿なつ！」

顔色を変えたベリスに、私は慌てて付け加える。

「でも、シャックスは死んでないかもつて」

「シャックスがそう言つたのか？ 本当に？」

頷くと、ベリスはホッと息を吐いた。

「それならシトリは無事だ。きつとビijoに閉じ込められているんだ。すぐに助けに行ってやらないと…」

なぜシャックスの言葉をそのまま信じるのだろうか？少し疑問が湧く。

（幼馴染みだから？）

魔王とベリスが幼馴染みで、魔王とシャックスも幼馴染みであれば、ベリスとシャックスもおそらく幼い頃からの知り合いだろう。

もしくは、彼らも幼馴染みだったかも知れない。

ともあれ、ベリスはシャックスに絶大の信頼を寄せているらしい。

生きているかもしない本物の魔王を捜すと言つて、ふらふらつとベリスは歩き出す。

何処へというわけではない様子だ。
あてもなく捜そうといつらじい。

その後ろ姿がまるで主人を探す忠犬のように見えて、私は彼が部屋を出てからも、その背が廊下の先をずっと進み、見えなくなるまで見送った。

15 唯一の毒

翌日、オセとの執務を終えた私はシャックスを訪ねた。

シャックスに使っている客室は、魔王の部屋と同じくらいの広さがあるが、あちらこちらに得体の知れないガラクタが散乱していて、ものすごく狭く感じられる。

その中でも、部屋のど真ん中を陣取っている大きな釜が、謎だ。

人間がそのまま煮込めそうで不気味である。

シャックスは私の姿を認めると、わざとらしげほど寧にお辞儀をした。

「わざわざのお越し、ありがとうございます。陛下もじきや」と

「陛下もじき……つて」

間違つてはいないけれど。

(なんか、ムカツク)

シャックスに勧められた椅子に腰掛けながら、私は、それで、と

彼を見上げる。

「私の方からは特に情報はないんだけど、そつちは何がある?」

「ラウム伯の部屋から、サマエル草が見つかった」

「サマエル草? 何それ?」

「サマエル様の城に生えている毒草だ」

(サマエルって、誰かの名前だったのか)

まずはそこから驚いた。

なんと言つたか私の魔界知識は、ゼロなのだから仕方がない。

1から説明してくださいと、シャックスに視線を送った。
彼は私と向き合つように腰を降ろすと、鋭い眼をさらに細めて、
生まれ持つた人相の悪い顔をさらに怖ろしくする。

「その名は『神の悪意』もしくは『神の毒』という意を持つ。…サ
マエル様は墮天使だ」

「ふーん」

墮天使ってことは、カイムのように、元は天使だったんだけど、

悪魔になつたつてことだな。

それにしても、悪意とか毒とか、すうじい名前である。

それから彼はガラクタの中からティーポットを探し出すと、同様に探し出したカップに紅茶を注いだ。

絶対に冷めていると思ったそれは意外にも湯気が出ていて驚いたが、更に驚いたことに、ガラクタから巨大ゼリーが発掘された。

両手に乗るくらいに大きな緑色のゼリーを、シャックスはナイフで薄く切ると、皿に乗せ、私に差し出す。

食べろ、といひとらしく。
けど…。

私は無言でゼリーを見下ろした。

(食べたくない。衛生的にどうよ、これ)

ピクンシヒ、シャックスの眉が上がった。

(また心を読んだな…)

仕方がないので、私はシャックスからスプーンを受け取つて、一口含んでみた。

(あれ？ 何といつか、まずくない)

緑色に反してオレンジ味なのだが、そうだと思って食べてみれば、結構おいしい。

意外過ぎて、瞳を大きくする。

とはいって、衛生的にはどうだかやつぱり分からぬが。

もつとも悪魔相手に衛生面を期待してはいけないのかもしれない。

次に、紅茶に手を伸ばした。

ラウムが入れてくれる紅茶の辛さを思い出しながら一口含む。

ところが、こちらも美味しい。

まったく辛くない。

むしろ甘い。

ホツと息を吐くと、シャックスの表情が微妙に緩んだ。

彼は紫色の草を私に差し出す。

「それがサマエル草だ。サマエル草の毒は、我らに効く唯一の毒。
それによって命を落とすことはないが、用いる量によつては魔力を
封じられたり、記憶を操作されたりする」

「記憶を操作するつて？」

「ある特定の記憶を失わせたり、偽物の記憶を植え付けたり……だ」

「へえ。魔界にはそんなことができる草があるのかあ」

感心してシャックスを振り返る。

そして、それにしても、と私は首を傾げた。

「なんで、そんなもんがラウムの部屋にあつたの？」

シャックスの口調から、そのサマエル草とやらせ、誰でも所有している物ではないみたいだ。

そりやあ、そつかもしれない。

毒草なのだから。

「ラウムはサマエル草を何に使つつきなのかな？」

「或いは、何に使つたのか……」

「え？」

私の言葉を過去形に言い直して、シャックスは考え込むように無言になってしまった。

充電が切れた携帯電話のよつこ、うんともすんとも言わないシャックスに諦めを付けて、私は彼の部屋から出た。

そして、すぐに私を待つ人影に気が付いた。

ずっとそこでそうしていたのだらうか。

壁に背を預け、腕を組み、瞼を閉ざしている。

私が彼の名を呼ぶまでそうしているつもりなのではないかと思わせた。

一つ、呼吸をしてから、私はその名前を呼んだ。

「カイム？」

声を掛けると、碧い瞳がすっと開かれる。

「陛下」

その瞳の輝きを見て、私は直感的に、ここは逃げた方がいいと悟った。

初対面の時もそつだつたけれど、この悪魔に関わるとどうかなことがない気がする。

（キスされたし…）

それは手だつたけれど、そのせいでベリスにまで襲われるハメに

なつたのだ。

「厄災がこの悪魔のせ」と言つても過言ではない氣がある。

なので私は、じゃあ、と言つてさう氣なく去りつとした。

だが、あえなく、私の腕はカイムに掴まれた。

(めめあーつー)

「うなつては逃げられない。

腹を括つて、私はカイムに振り返つた。

「えーっと、何?」

顔を引きつらせながら尋ねてやると、カイムは私の腕をぐいっと自身の方へと引き寄せた。

とんつ、と私の肩がカイムの胸に当たつた。

「 雰囲気が変わられた 」

「 えつ 」

ドキリと胸が鳴る。

けして、元天使ただけある綺麗な顔が近いからではない。

偽物だとバレたのかと思ったのだ。

冷や汗が流れた

「どうが？」
「どうも変わつてないよ」

聞き返すと、カイムは口元を緩めて首を傾げる。

「エリと繋ねられた事も出来ぬる事せよとせんが、エリとなく
変わられたよつて事のやうだ」

「それは、きっと氣のせいだよ！」

私は言い切つた。

(ビ)だかハツキリ答えられないようなものは氣のせいにするのが一番!)

うんうん、頷いて、私はカイムを納得させようと試みた。

ところが次の瞬間、くつくつと、笑い声が響いた。

きょとんとして見上げると、カイムが耐えられないほどばかりに笑つている。

「もう少しマシな答えようはないのか？」

彼は背後に向かつて片手を振り上げた。

「オセ、お前の思った通り、こいつは陛下ではない。魔力も感じないしな」

そうですか、と静かな声が響き、柱の影からオセが姿を現す。瑠璃色の瞳で私を見つめ、何やら納得したように頷いた。

(いつたい何事！？)

状況が呑み込めない私に、オセは穏やかに微笑んだ。

「カイム殿が言われるのでしたら、間違いありませんね」

(あれ？ もしかしてバレてる？)

あつさり過ぎて危機感がない。

呆気に取られながら悪魔一人を見上げる。

「えーっと、いつから?」

「二日前でしょ?」

オセは胸元から紙切れを取り出した。

「捕らえたラウム伯の使い魔が持っていたものです。先王陛下宛の書状のようですね。内容は……陛下がお亡くなりになつたと、驚くべきことが書かれています」

(ショジョーラ?)

そういうえば、そういう手紙を誰ぞに送るとかなんぢやラウムが言つていたような気がする。

その内容からオセたちに偽物だとバレたつてことは、ラウムのミス?

私のミスじゃないよね!

：いや、待て。

私のミスだ、ミスじゃないっていう問題じゃなくてつ。
偽物だとバレたら、私、どうなるわけ!?

パニーくる私を他所に、オセは優しげな口調で続けた。

「陛下がお亡くなりになつたなど、私には些か信じがたいことです。それはカイム殿も同じ。たとえ、それが眞実だとしても、そのことをラウム伯だけが知つているというのも、なにやら裏がありそうですね‥。さて、このことについて、シャックス侯にもご意見をお聞きてしましょう」

言つと、オセはシャックスの部屋の方へと振り返つた。つられて私も振り返る。

(何!?)

薄く扉が開いており、その僅かな隙間から橙色の瞳が覗いている。シャックスだ。

考えてみれば、ここはシャックスの部屋の真ん前。これほど近い廊下の騒ぎを気付かない人がいるとしたら、かなりの勢いで鈍い人だ。

幸い、シャックスは騒ぎに気が付いたらしく、扉を僅かに開いて廊下の様子をジッと窺つていたらしい。

(てか、見てないで助けようよー 私を!)

そりやあ、シャックスにとつて魔王の偽物である私なんかを助ける義理はないのかもしねないけれど。

(でもーあなたのゼリーを食べてあげた仲じゃん!)

あの一見あやしげなゼリーをー
と、シャックスを睨めしく睨み。

ジト目で思いつきり見やつてやると、シャックスはいかにも致し方がないという態度で、廊下に出てきた。

田付きの悪い顔が、一同を見渡す。

「我は、陛下はじ無事だと思ひ。おそれらくラウム伯の手によつて、
サマエル草で魔力を封じられ、どこかに閉じ込められているのだろう」

シャックスの言葉に、オセも大きく頷く。

「わたしも同じ見解です」

「またラウム伯の悪戯か…」

「いいえ。ラウム伯のこつもの悪戯にしては、些か目に余ります。

もしや裏に何者かの影があるのかもしません

「あり得るな。ともあれ、我はもう少しラウム伯の身辺を調べるつもりだ」

「では、わたしはラウム伯の使い魔の動きを」

「俺は……」

言い掛けで、カイムは私を見やる。
碧い輝きを受けて、ドキリとする。

そして、人間嫌いな悪魔は意地の悪い笑みを浮かべ、すうっと、腕を私の方に伸ばした。

「不本意ながら、俺はその人間をラウム伯の手から守りたい」

不本意って……と思つたが、まさか悪魔の護衛が付くとは驚きで、私は口を挟むことを忘れた。

バレたら殺されると思つていた。

だから、バレないよひこと氣を付けながら過ごしてました。

なのに、いつたいどうこうわけだらけ。
今はバレてホッとしている。

無事に人間界に戻れる日も近いかも知れない。

俄然、頬もしく見えてきた悪魔たちを見つめて、私は小さい喜びを胸に抱いたのだった。

あひーひの悪魔にバレまくった日の翌朝。

食事を取っている私の横で、ラウムが顎に手を当てて首を傾げた。

「今日もオセ様は『用がおありだそ』です」

「…とこひ」とは?」

「今日も執務は『やれ』ません」

私はこいつそりガツツポーズを取つた。

魔王の何が大変か、つて?

そりやあ、魔王らしく執務をすることだ。

ちょっとでも間違えたら、いけないような気がして、ものすごく
気が重かったのだ。

(オセにバレて良かつたなあ~)

そして、オセがラウムと違つて、偽物に執務を任せられるよつた非常識ではなかつたといつことに感謝する。

「おかしいですわね……」

あちこちでバレまくっていることなど、露とも知らぬラウムは、右に傾けた頭を左に傾け直す。

「『ぐらぐら』親友が来られているからと言つて、あの眞面目なオセ様がいつも度々お休みなさるなん……」

おそれらくオセの『『アリ弔』』とは、ラウムの身辺調査だ。

オセが怪しい、ベリスが怪しい、カイムが、シャックスが……。

そう、他の悪魔たちを怪しんできたラウムが、今度は怪しまれる立場になっている。

ぶっちゃけ、私には誰が怪しいのかすら分からぬ状態だ。

嘘を付かない悪魔なんて、嘘を付かない人間以上にいよいよ気がするから、誰を信じて良いのかなんて、サッパリ分からない。

だから、私はどの悪魔も安易には怪しまない。

そして、どの悪魔も完全には信じないようにしてや。

そう決意しながら、退室していくラウムの背を見送った。

ラウムの足音が聞こえなくなると、私はそっと部屋から抜け出した。

『お部屋で』『やつしりお過い』『下わせ』と、ラウムには言われたが、『やつしりなどして』『気分ではなかつた。

完全に信じられる相手がないのなら、自分の足で動いて、自分の目で確かめなければならない。

と言つても、オセのようにラウムの使い魔を捕まえるなんて芸当はできないので、彼らに任せらるべきといふは任せておく。

（とつあえず、昨日のよつにシャックスに会いに行つてみよつかな）

なんとなく、彼らの中ではシャックスが一番権限があるっぽい。爵位が『侯爵』だからだろつか。

公爵のベリスの方が上位なのだが、最後に見たベリスの様子を思い出しても、ベリスを探そうとこう気にはなれなかつた。

本物の魔王を捜しておまよつ姿は、まるで迷子犬。

ベリスを頼りにしたら、自分で迷子になりやうである。

そここの角を曲がればシャックスの部屋があるところといつて、私は足を止めた。

廊下の端からひりひりに向かってくるカイムの姿を見つけて、ちよ

つぱり複雑な顔になる。

(たしか……。護ってくれるんだよね……?)

昨日の話では確かにそういうことになっていた気がする。
その時、カイムも私の姿を認めて、口元を緩めた。

その笑顔が、なんか胡散臭い。

(こいつ、ものすごく人間が嫌いなんだよね?)

ちゃんと護つてくれる気があるのか怪しいところである。

やっぱり完全には信じてはいけない。

自分の身は自分で護るという覚悟でないと。

カイムは軽く片手を上げて、親しげに歩み寄ってきた。

「おう、人間。どうした?」

「人間って……。確かに人間だけビ

不満一杯の顔をすると、カイムは笑った。

「名前、なんて書つんだ？」

「名前？ 私の？」

カイムが頷いたので、名前を答えようとして、私は顔を歪めた。

(あれ?)

せつぜんめば、と首を捻る。

「私、名前なんだっけ?」

「は?」

「忘れちゃったみたい」

「馬鹿か、お前。自分の名前だろ」

「そりなんだけど……。つーん」

「冗談ではない。

マジで思い出せないから、自分でも驚きだ。

困ったように長身のカイムを見上げると、カイムは呆れきった顔をしていた。

当然だ。

私が彼でも呆れてしまつ。

「ちょっと待つて。今、思い出すから…」

むむむり、と低く唸り声をあげる私。

思い出せりと、すればするほど、頭の中が空っぽになつてこぐ。
そんな感じだった。

ふと、私は口元に手を置いた。

そういえば、と思つ。

「私つて、人間界でじりじり暮らしていたんだろ?」

素朴な疑問。

まさにそんな感じに私は、ふと浮かんできた疑問を口にする。

「高校生だった記憶はあるんだけど、それ以外のこととは思い出せない。…なんでだろ?」

父親はいたよつな氣がするが、母親はいた氣がしない。

兄が一人いたよつな氣がするが、母親はいた氣がしない。

それから、友達がいた。

長い黒髪を二つお下げにして、いつも大きな瞳で私のことを見つめてくる少女が……。

友達？

あの子は本当に友達だったんだろうか……？

「お前って……」

呆れ声が頭上に降ってきて、私はカイムを見上げた。
彼は、やれやれ、と苦笑を漏らす。

「ホント変な人間だな」

「……」

「」の時ばかりは言い返せないので、黙つていると、頭をくしゃりと撫でられた。

「いつから名前を思い出せないんだ？ 他に思い出せないことほか、逆に何を覚えていいんだ？」

「……」

「もつと不安がつたらどうだ。突然魔界に連れてこられたんだろう？ 帰りたいと泣き喚いたつていいはずだ」

これは心配してくれているのだろうか？

嫌いなはずの人間があまりにも間抜けで、無害そうで、哀れで、それで心配になってきたというわけだろうか。

「ほら、泣け泣け。今なら胸を貸してやる」

「いらない…。べつに、泣きたくないから…」

カイムの言つとおり、いきなり魔界に連れてこられたわけで、自分の名前すら忘れてしまった私は不安たっぷりなはずなのだけど。

どうしてだるうか。
なぜかそういう気分にはなれなかつた。

シャックスの部屋の前。

その扉を叩こうと、手を伸ばした時、まるで自動ドアのように扉が開き、中から田代の悪い悪魔が飛び出してきた。

とんつ、と躰がぶつかる。

私も驚いたが、シャックスも驚いたようだ、僅かに瞳を開く。そして、その驚きを隠すように愛想のない挨拶をする。

「これはこれは壁下もじきぞ」と

「シャックスさん、何か分かった?」

対抗して、わざとらりじへ『ささ』付けで返してやれば、シャックスの細眉がピクリと跳ねた。

無言になつた彼に代わつて答えたのは、なぜかシャックスの部屋から現れたオセだ。

どうやらオセは自分が調査したことをシャックスに報告していたらしい。

「ラウム伯の部屋から、いのうつな物を

「なんだ？ 手紙か？」

怪訝な声が響き、私に差し出された紙切れを、カイムの手が横から攫つていった。

ちょっとびりムツとする。
だけど、すぐにカイムの表情が驚きに変わったので、私は不満を述べる暇が無かつた。

「これは…」

「何？ どうしたの？」

「ストラス殿下からの密書だ」

(誰からの何?)

首を傾げてから、ふと思い出した。

先王の王子で、シトリが王位を継いだことに不満を持っている人物だ。

「具体的にはなんて書いてあるの？ 読んでー！」

「シトリ陛下を殺し、ストラス殿下との王位を差し出せば、公爵地位とシトリ陛下の亡骸をやる…と」

クシャリ、と、カイムの手の中で小さな悲鳴が上がる。

オセが慌てて、カイムから密書を取り上げた。

ラウムとストラスとの繋がりを明かす大切な物を破られては大変だ。

「…なるほどね、ラウムは公爵地位が欲しくてストラスつて奴と手を組んだわけだ」

私は腕を組みながら、しみじみと言つた。
ところが、三人は揃つて首を横に振つた。

「公爵位ではなく、陛下のお体が目当てだと思いますよ」

「我とて、ストラス殿下にそう誘われれば容易には断れない。
いや、殿下が我に声を掛けて下さつていれば、ラウム伯よりもっと
うまく事を運んだだろ？」

(何だつて、シャックス?)

「もしも陛下の体が貰えるとしたら、俺ならガラスケースに入れて、
毎日眺めるな」

(はー?)

「わたしなら都會の良い魂を入れて、生産機械のように執務を行つていただきませ」

「ははは。何だよ、それ。ホント夢がないよな、オセサ

「そんなことないですよ」

(こやあーっ。なんなのこの悪魔たちっ！　夢がどこのいつのいつ問題ぢやないよ。君たちの思考回路はどうなつているんですかっ！……)

ガラスケースの中に入れられるのも、生産機械みたいになっちゃうのも、絶対に無理！

嫌過ぎる！

(つーか、君らの王様なんだしょ？ 敬いなさいよ。なんで、そんな、みんながみんな、体面でなんだ！)

つかりベリスに押し倒された時のことを思い出した。
あれはあれで立派に体面でな行為だと想つ。

〔冗談はさておき。〕

表情を真顔に戻すと、ぱちん、と拳を口の手のひらに打ち付けながら、カイムが眼を強く輝かせた。

「あの女をひとつ捕まえてやるー。」

「ええ、当然です」

オセも強く頷く。

だが、すぐにその顔を顰め、ですが、と続けた。

「陛下の身が心配です。の方は、追い詰められると何をしでかすか分からぬ方ですから」

確かに、と思つ。

私はラウムのことをそんなに知らないけれど、ここ数日間、彼女と接して感じたことがある。

なんといふか、極端だ。

思い込みが激しいといふか、感情が突つ走つているといふか。

一度、激した彼女が、不自然なほど急に態度を変えたことがあつた。

つまく言えないけれど、そういうところに彼女の心の不安定さを感じた。

『追い詰められると何をしでかすか分からない』

まさにオセに言葉通りだと呟つたのだ。

魔王シトリーを心配するオセに振り返った。

「魔王のことは、ベリスが捜してくるよ」

「ベリス公が？」

「うん。捜すって言つていたし…。もしかしたら、もつ見つけたかも」

これは希望。

無事に迷子犬が飼い主のもとに帰れるといいなあ、って感じの。

だけど、私の言葉を真に受けで、シャックスが頷く。

「ならば、ベリス公の気配を追う。生死の定かではない陛下より、ベリス公の気配の方が追いやすい」

ぱちりと、シャックスは瞼を閉ざした。

そして、そのままジッと動かなくなってしまった。

何をしているんだろうか、と小首を傾げた私に、カイムが自分の唇に人差し指を押し当てる。

「え？ 何？」

「少し静かにしてる。ああやつて気配を追っているんだ」

「ああ。なるほど」

何がなるほどなのか、サッパリだが、とりあえず頷いておく。しばらく、じっと待っていると、あちらだ、ヒシャックスが呟くように言い放った。

「あちらって？」

私の問いを華麗にスルーして、三人の悪魔は顔を見合わせ、頷き合つと、サッと踵を返した。

城の外へ出るのだと言つ。

慌てて、私も彼らの背を追つた。

「あの女、ぶつ殺す！」

実際に悪魔らしい物騒な言葉である。

オセから一通りの事情を聞くと、予想に寸分違わずベリスは吼えた。

怒りに顔を赤くしているベリスに私は、それで？ と尋ねた。

「魔王は見つかったの？」

魔王そつくりな私の顔を見て、毒氣を抜かれたのか、ベリスは幼子みたいに、こくりと頷く。

「ああ、じつちだ」

先に立つてベリスが歩き出したので、私たちも足を進める。

魔王城から出てすぐのところに薄暗い森がある。

紫色の霧が掛かっているから、ますます暗く、そして、陰気に見える。

その森の中を進むと、やがて背の高い建物を見付けた。

ベリスはその扉の前で足を止めた。

「ソル、私が召喚された場所だ

「そりなの?」

零した言葉を拾つて答えてくれたのはカイムだった。彼を仰ぎ見て領けば、彼は神妙な表情を浮かべた。

「ソルは教会だ」

「え。魔界にも教会があるの?」

「ああ。だが、神を信仰する場ではない。俺たち悪魔が等しく崇め奉る方は、皇帝陛下だ」

魔界の皇帝とは、多くの魔王を束ねて居るという存在のことだ。

通りで、と思ひ。

建物の中には十字架が一つもなかつたわけだ。

神ではなく、悪魔の皇帝を信仰している場所だと聞いて納得する。

悪魔たちの教会の入り口の扉の前に立つと、ベリスはそこに両手を着いて息を吐いた。

「」の中に陛下はいらっしゃる

「その扉、開かないの？」

扉に両手を着いた格好で項垂れているベリスに、私は首を傾げる。ベリスは頷くと、僅かに上方を指差した。

「これを見ろ」

悪魔たちが息を呑む音が聞こえた。

「この紋章は…」

扉に大きく描かれた紋章。

悪魔たちは愕然としてそれを見つめている。

「ストラス殿下のものだ。これが描かれている限り、この扉は俺たちには開けられない」

「ベリスでも？」

「試してみたが…」

ベリスは頭を左右に振る。

「殿下を上回る力の持ち主でなければ不可能だ。くそつ…この中にいらっしゃると分かっているのに…」

ガツン、と壁に拳を打ち付けて、ベリスは俯いた。

「！」の上はラウム伯を問い合わせるしかない。彼女がこの扉にストラス殿下の紋章の力を使い、封印を施したのであれば、おそらく彼女には扉を開けることができるはず」

「できなきや、殺す！」

できても殺すのではないかと思う剣幕だ。

私はベリスを見やり、それから、ハツとして振り返った。

足音を忍ばせて近付いてきた影に、誰よりも早く気が付いたのだ。

影。

彼女だ。

「ラウム」

「何！」

クスクスと笑い声が響いた。

すうっと姿を現せたのは、やはりラウムで、彼女は一同を見渡して冷ややかに言い放つた。

「何ですか？ 騒がしいですわ」

「ぶつ殺す！」

「まあ、怖い！」

ラウムの顔は変わらず笑顔だ。

目を細めて、口元を横に引いている。

「ラウム伯、貴女の企みはすべてお見通しだ。貴女の後ろにストラス殿下がいることも。そして、その扉の向こうに本物の陛下がいるのであります」

「ふふつ。その通りですわ

シャッククスの言葉を受けて、ラウムの瞳が怪しげに光った。

彼女は笑う。
不自然に。

「バレてしまつては致し方ありません。せめて、最後の足掻きをさせて頂きます！」

ラウムの輪郭がぼやけた。

彼女の体は変形し、みるみるうちに巨大な翼を持つ獣の姿になつた。

獸。

：いや、違う。鴉だ。

闇よりもなお暗き鳥。

赤い眼をギラギラさせてこちらを見下ろしている。

バサリ、と、すぐ近くで音がして、私はベリスを振り返る。

彼はマントを脱ぎ捨て、鼻を軽く鳴らした。

「俺がやろう」

ベリスは鞘から大剣を抜き、真っ直ぐラウムに向かって構えた。低くしゃがれた声が響く。

「ベリス公。相手として不足はない！」

それがラウムの声だと気が付くのに、僅かな間を必要とした。

鴉の嘴から響いてきた声は、ひびくしゃがれていて、とても女の子の声とは思えない響きだったからだ。

戦う気満々のラウムに対して、ベリスは口笛を吹いた。

（なんて悠長なー。）

そう思つた時、どこからともなく蹄の音が聞こえてきて、やがて血のように赤い馬が姿を現した。

ひらりと、その背に乗ると、ベリスは片手で手綱を握り、空を駆けた。

ラウムに向かって大剣を振り下ろす。

炎が舞う。

それはベリスの大剣から現れたもので、ラウムの体を包み込むように襲つた。

「ぐはあーっ」

苦しげに呻くと、仕返しとばかりにラウムは翼を羽ばたかせた。黒い羽がナイフのようにベリスを襲つ。

だが、ベリスはそれらをすべて大剣で薙ぎ払つと、再び炎を生み出した。

「喰らえっ！」

それは、ベリスの炎がラウムに襲いかかるのと、ほぼ同時だつた。

ラウムも嘴を大きく開き、咽の奥から稻妻を吐き出す。

稻妻は炎を突き抜けて、ベリスを貫いた。

「ベリス！」

私は思わず悲鳴を上げた。

光の剣が彼の身体を串刺しにしたように見えたからだ。

だけど、心配はいらなかつたようで、ベリスは頭を緩やかに振ると、けつ、と不敵な笑みを浮かべた。

「少しばかりやるようだな。こっちも本氣になつてやるぜ！」

吐き捨てるように言ひつと、ベリスは赤い馬の脇腹を蹴り、ラウムに向かつて駆けた。

「死ねつ！」

大きく振り上げられた剣。

今までよりも一段と大きな炎を纏い、それは今にもラウムに振り下ろされようとしていた。

不意に眩い光りが放たれた。

それはラウムの手のひらからで、複雑な模様がそこに浮かび上がっている。

「ストラス殿下の紋章か」

模様を見て、ベリスは怯んだ様子を見せた。

その隙を付く、ラウムは教会の扉へと駆け寄る。

彼女が手を触れさせると、あれほど固く閉ざされていた扉は難なく開き、彼女を内へと招いた。

「待てー。」

追つて、ベリスが建物の中に駆け込む。

更にその背を追つて中に入った私は、黒い棺を盾にしたラウムの姿を見る。

ラウムの大きな瞳と目が合つ。

その必死な瞳に私は言葉を失い、立ち去くした。

「陛下へ向ひの申立てをいたしました。」

「何だと？」

「剣を降ろして下せ……」

「気が付けば、いつの間に、ラウムの姿は鴉ではなく少女に戻っている。

その表情は険しく、ベリスに向かつて声を荒げる。

「ベリス公、陛下の身がどうなつても構わないのですか！」

「くそっ」

カラーン、ヒベリスの剣が鳴る。

彼の手から離れたそれは所在無く床に転がった。

「陛下をどうするつもりだ？」

「ストラス殿下はわたくしにお約束して下せいました。殿下が王位を継いだ暁には、陛下をわたくしに下さると。そのため陛下を殺し、先王陛下にその死をお知らせするつもりだと」

ラウムの瞳が揺れる。

常に微笑んでいた彼女が見せる、苦しげな表情だった。

「死体でも構わなかつた！ 一度と陛下がわたくしに手を差し伸べてくださらなくとも、わたくしの傍にずっといてくださるのなら、それで構わなかつた。陛下を……わたくしだけのものにしたかつた」

ガクン、ヒラウムの膝が折れる。

両手を床に着き、頭を垂れる彼女を悪魔たちは静かに見守る。

そして、静かにシャックスが口を開いた。

「その想いは分かるが、陛下が誰か一人のものになることはない。
陛下自身がそれを望まぬ限り」

シャックスはベリスの横に立ち、真っ直ぐヒラウムを見据えた。

「さあ、その棺を開けられよ」

俯き、ラウムは唇を噛みしめた。

そして、両手で棺の蓋を握ると、持ち上げる。

ガタン、と音を立てて棺が開く。

棺の中には、私そつしつな魔王が眠っている……はずだった。

「え？」

私が声を上げると、悪魔たちからも同様に疑問の声を上がる。

「ラウム伯、これはいったいどうしてだー。」

棺の中は、空だったのだ。

今にもラウムに飛び掛かるかとするカイムの肩を押さえ、オセも険しい表情でラウムに問う。

「陛下はどういらっしゃるのですか？」

彼女は棺の中に手を落とした。

すると、白い小さな光りのような物が、ふわふわと、棺の中から現れて、ラウムの手の中に収まる。

つまーっと、ラウムの頬に涙が伝った。

「どうして陛下を殺せましょうか。わたくしでできたことは、陛下

にサマエル草を呑ませ続けることのみ。飲み物に混せて、魔力を封じ、この棺に陛下を隠しました。けれど、永遠に隠し続けることはできません。いつかベリス公たちに知られ、陛下を取り上げられてしまひ。ならば、わたくしの思い通りになる陛下を作り上げればいい。そう思い、再びサマエル草を陛下の口に呑ませました

「お前、陛下に何をしたんだ？」

ぐつと、ベリスの咽が鳴る。

その顔は既に答えを知っているかのように青ざめている。

「わたくしは陛下の記憶を操りました。魔王としての記憶を奪い、偽物の記憶を植え付けたのです」

「まさか…」

「陛下がベリス公たちに不信を抱き、遠ざけてくれば、と願っていました。わたくしだけを傍に置き、わたくしだけに微笑んでくだされば、と」

「だから、あんなにもベリスたちを歓迎して言っていたの？」

私はベリスやシャックスの前に立ち、ラウムを見据えた。
彼女は、こくん、と頷く。

「これが陛下の魔力と記憶です」

ふわり、と、ラウムの手のひらから白い光りが浮かぶ。水中に漂つよう、むつくつと私の方へと飛んでくる。

やがてそれは私の額にぶつかって、すうっと頭の中へと消えていった。

「……」

そうか。

だからラウムの入れる紅茶やラウムから手渡された水はあんなにも辛かったのか。

最初に思ったことは、そんなこと。

おそらく魔力と記憶を封じ続けるために、サマエル草を飲み物に混ぜていたのだろう。

不思議と、怒りは湧いてこなかつた。
許すとか、許さないとか、そういうことも違う。

そこまで私が好きか、と少し呆れただけ。

私は眉を下げる、唇の端を持ち上げ、ラウムに視線を向けた。

「バカだね、あんたは…」

思い出した。
すべてを。

そして、思い返してみれば、植え付けられた記憶の中の友人は、ラウムだった。

長い黒髪を二つお下げにした可愛らしい少女。

魔界ではなく人間界で、悪魔ではなく人間、身分も地位も無ければ自分と彼女は、その偽物の記憶のように友人になれただろうか。

おそらくなれたはずだ。
誰よりも親しい友に。

だけど、それでも、私は彼女だけのものにはならなかつただろう。
彼女のことを大切に思つが、彼女だけが大切なわけではないからだ。

両手を地に着き、頭を下げるラウムに、私は淡く笑みを漏らした。

「もういいよ。許す」

「陛下」

諫める声に振り返つて、今度は軽く苦笑し、頭を左右に振つた。

「ひつして私も無事なわけだし、魔力も記憶も戻つた。ストラス兄上は困つた方だが、あの方と争つ気はない。オセがラウムの使い魔を捕らえてくれたおかげで、父上にも知られていないようだし、もういいだろ？」

「しかし…」

言い募ろうとしたオセの言葉を遮るよつて、低く唸り、大きく伸び上がつた。

高く高く腕を伸ばして、つまらないと、紫色の空に向かつて、ぼやく。

「あーあ。五日間も人間ごつこやつて疲れちゃつたよ。ひとつと城に戻るよ。んで、戻つたら、ラウム、お茶入れて。サマエル草抜きでね」

そう言つて、彼女の方に振り返ると、ラウムが駆けて来て、左腕に抱きついた。

「陸下、陸下…」

涙に濡れる頬を拭つて、彼女の右手を取る。
その手のひらに刻まれたストラスの紋章を、口付けを落として消してやる。

一件落着。

そう思つた時だ。
不意に大声が上がつた。

「あれ？ 胸は？ あの胸の膨らみは何だつたんだ！」

ベリスである。
その横でシャックスが肩を竦めた。

「ベリス公は未だに我の嘘を信じていたのか

「嘘つて？」

きょとんとして、彼は隣を見やる。

「男が女に変化する奇病などない。陛下は元より女性だ

「は？」

なんだつてーっ、と絶叫が響く。
笑い声を上げる五人の悪魔たち。
知らないのはベリスばかりだ。

「陛下がお生まれになつたのは、先王陛下がお一人の王子たちと親子の契約を済まされた後のことでした。陛下を後継にしたいと考えられた先王陛下は、陛下を王子として育てられたのです」

「故に、陛下が女性である」とは極秘事項だ

「わたくしはもちろらん、カイム様も存じのことでしね

「なんで俺は！」

「ベリス公はすぐに顔に出される故」

「だからってー！」

「そして、いざ知られても、幼い頃からそのよつな奇病があると吹き込んでいれば、笑いのネタになる」

予期した通りの結果だったと、シャックスは満足げに言った。
ベリスはガツクリ肩を落とす。

「ひどい…」

確かにひどい話だ。

そんなひどい話を信じてしまつヤツもどうかと思つが、その嘘のおかげで、私はベリスに胸を触られたのだ。

お前のせいが一つ、と睨むと、シャックスの細い眉がピクリと動いた。

ふと、ラウムが腕を緩め、体を離した。

そう言えれば、と胸元から黒い封筒を取り出す。

「これは、大公殿下からの書状です。陛下宛で届いていましたわ」

「大公つて…。ええつ！」

魔界で『大公』と呼ばれる人物は一人しかいない。
皇帝と同等の権力と実力を持つた悪魔、アスタークトだ。

「なんでそれを早く言わないの！」

「だつて、忘れていたんですね。うつかりですわ

ハートマークを振りまきながら、ラウムはこうこつ語つ。

「大丈夫ですわよ。一日前に届いたばかりですもの」

「一日…」

「陛下、とにかく中を確認してみましょ。急ぎ返書を送らなければ非礼になる内容かもしません」

事の重大さを理解し、私と同じくらい青ざめてくれるのはオセだけだ。

そして、騒動の絶えない私の側に常にいてくれるのも、彼。

悪魔つていうのは、退屈に恐怖し、トラブルを歓迎するものだって言つけれど、私とオセはいつだつて平穏を求めている。

(ホントに、もう勘弁して欲しい!)

私は黒い封筒を恐る恐る開いた。

そして、新たな嵐の訪れを予感しながら、文面に目を落としたのだった。

最後までお付き合い、ありがとうございます。

この小説は、もともとフリーゲームとして公開したオリジナルゲームを小説化したもののです。

ですので、ネット上で検索して頂くと、同タイトルのゲームが出てくるかと思います。

合わせて楽しんていただければ、と思っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933j/>

召喚魔王

2010年10月8日14時14分発行